真言式海印象

這字
手本
彩色
入
大
付
格

貞享式海印錄六

□数字美同殘不揃　曲　歌制　述

帝國文庫

多保有

[享二]凡数字も美字も年月の変を先すて文字の上すて然もこゝ寸強に一重山一つのぬき猪紋の柏葉の耳を字めて二白巳ゝ許すゝ

かくのごとく支考俳諧同別殘多ゝえゝ数字ゝ

字面もおく美もおさまれゝ活字ゝ数字ゝ辞

ゝまゝて殘ゝ許ゝ多ゝ蕉門の定制ゝ

白

ッ

まんじゅうの海のちんさく　り牛

葬れる今ゝ海くをつゝ　ヤハ

女房の形て一りのもゝ　許云

座敷もいもゝ十分の秋　キ角

白見

山彼の門ゝ花をむゝの月　秋色

言ゝ傳つゝ一対の玉箒　宝玉

イ

おゝ花とかゝく蕉ゝ色原　桂花

ゝ月ゝて蕉ゝ代ゝの秋　色

初冬　イ

市尾　吉刊

山ト　、

皮　日一

石日　初も　来初秋　山宗
吸おい松もときとて柚の白　ソ由
されの男い一弱弟千　巴兮
旅ゆゆまは恨て宗れ〜たを文　柳士
情の浮をて十和志ゆ〜　吉欣
抜たて い扶の石と吉人京　是通
ねと一夏とよん初ゆして　秋坊
初信の二字い独一新の板　香均
人の情を夏原ておゆ〜　莊素
ひすゆく信い二人を打吉て　孝
徳会の表ゆる考す早を　原ト
信ゆまて吉い幸門きやく　坊
浅きけい三原ゆ吉ゆ古ゆを　号ふ
一ゆふ　欠て京ゆ弾る乱　ト
ゆゆ〜〜品い亀めを只州　、
草ゆ一ワ　孫の孤巳　キ角
一孫入て文俗い宗の月　文州

拓　、

ゆゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ〜ゆ妹ゆ吉ゆ　呂初
ゆ吉おく十二亀の吉ゆて　尾フ
島吉ゆ和又い人答ゆお　一宇
十夜い浅ゆ年の極乐　コ杖
ゆゆ一七ゆ月の酒阪　キシ

さ　、

夕　、

大の得ゆ和義の猫ゆ一人お　東初
京の性ゆ　久ゆゆし
石人のゆ一ゆ一入吉の月　六之
鬱金の文尾ゆ分て又一初　乃孔
たゆひの草ゆ立ゆて有す　東如
め生おき俳い京ゆ一京ゆ　ト
世尾花立ゆゆ京ゆ吉ゆ初ゆん　小
疾病ゆ京い俗尾ゆて　南木
間会い動暑ゆ各ゆ分ゆ吉ゆ分　、
ゆ吉ゆの外ゆ月冬ゆ吉ゆて　支考
拓の拓除ゆ川ゆゆ　一酉
人拳の原ゆ京ゆ俳ゆ晒拓　友梅
白拓

巴陽　、千

友夜　、五

杭　、

数字読

△数字三読　右仏一百句二示　多静

ひふも一日ほのみく椎　菊
さくら氏
菊あひと廿り鞄出る家業手　立木
唐く晴く十人寄とまんり　菊
武一登い栗乃れ年貢や八
ミ家
十手よ取るを売る助技お　菊
三尺通　我のきすを　八
り傍よ三社の祢を載て　ソラ
家合まるい明云のう年　そと
四五て為野の寺よ列て　写鶴
冬
万石も佐牌知門の戎うさき　佔木
一声もきれいよ二分ぬ入梅の中　如涼
廿にも十本て箕小路く　り木
菊
十月を夏ると越り桜花　嵐雪
時雨の中よ一節の急　おむ
枯
後の年の二分い悉くそ　万り
棒の裏よ云との人　年鵬

り枡
こんすくの風雅も残る二三月　丑相
一度通て入るきいが残　涼ト
一節よ仏の気とくさあして　文松
新
為もよしや吐血三代　キ角
熊坂を五十中ねいえよ　標泉
八景を席よおて落丁紙　茸二
四嶋
二人の白便携てりあふ　東如
一年先見ぬ陸奥の松木さし　佳木
かりも手借も借る錦五百　万丈
万仏
おろりも出来る十月の空　松浦
すくと二人連て丹波哉　五香
万あを笑深くる哀　万枝
十七
まろりと影す植木の一嵐　杖言
凹手うもの三八日寒　雲英
一匹を繋す相の四宮よ入　大志
為の手やうも四千八色　市佛
文章
独ん奈をのむ百よ通る三ての月　釣羽

ハ、モヤ　一三二

麦　三二七

りある一分を手帳の内
枝花とのかりこ二つ所に書き　古井
云さのさてらこ人すり拂ひ　あ士
接やれかくお二重の文字を　茂秋
日和いつくこ出来て　古山
花さうれる時雪の庭　青林

□廷字找不獲　カ仙十五を　多者

古今三廷字い見るおあれ三回もさるきゆ
▲四字字を獲ていい古式ゑ蒼つい上下逆戻も獲
さるえ廷字トハ今字ゑて木木ヲ木仝芽
芽ヲ芽々一日一日ヲ一日〻一月一月ヲ一月〻
ト畧するのゝ今の芽出仝芽〻〻芽
〻あれい三公仮名ゑる上字ゑ〻〻ト出
上二字ゑ〻〻ト出三字ゑ〻〻ト〻〻され
ゑ二字已上い芽〻〻ゑ所も拂ゆ〻〻む
さるゑ上二字の付る〻〻ト〻〻い系譜ゑ或ハ

二字已上の付一月〻〻ト出ていい一月月月ゑ
孫ゑて一々月々ト孫ゑ又二月月ゑ
孫あむ仮名難する付い難あれゑ推てよ
もゑ於いあ〻ゑる他社い仮名ゑあまて
一々月々トハ出ゑ〻ゑい一月〻〻のゑる字む
へ〻是ゑと仮名ゑのゑあ〻ゑれいむ〻〻と
トもち〻〻トハ出方仮ても別ゑあ指合
あゑゑ中い支乃も初て仮ゑ〻〻三回もさ
きとい仮ゑを孫ゑこ門下の人氏語ゑ或ハ
ゑる多ゑ事　孫社ゑ　冥者の日

義拔　くの
さま〻〻の貝拾ゑる　布袋　義
地獄車ゑ〻〻拾の哀さ　口函
きぬ〻〻の屑貝ゑ陸之浪もむ　木因

孫字　いと
ちゑ〻〻と相のて居るきゆ紙　義
出付てある答の稔る古日　ヤハ
やゑ〻〻と書記されて髮抜　義

ふ〳〵ときもるゝ分る貝の売　稚雅
岐つくさめのつくゝ風　イ拾
さりゝと花ちる大あら先　ロ蓼
むゝ〳〵と木まちゝ市立て　一鬢
桜記の信乃天宗付　香函
ちち〳〵と井さゝくてあさみる　香晨
きら〳〵と金打鍛ゝ打ゝ　一由
雅そそ赤〳〵寸詞ゝとのゝ　信業
あ〳〵と河ゝ鈴。掾のむ　一庸
ち〳〵　打〳〵　鶏の子　十丈
傳ゝ寺床の孟宗風荒て　牧壹
おの〳〵一ツ　枝　交ゝる　ホ枝
ちん〳〵ゝゝある　林の下あ　序六
花止て序祝る　鈴雅　独
かゝり〳〵ゝゝ　ゝきき　皆芳
あゝの日のてゝゝゝて　咲人
云拾ゝ　ゝとおゝ　ヤ水

あゝ　こと　上下
ふ〳〵ゝゝ　時の市の　信ゝあぐ　カ分
狐ゝゝや人の　ゝゝ　人
柏木の　扇乳　時ゝ　水
城下いゝて　信夜の　ゝ
連奇の　花多　お　鈴く
あゝ　ゝ　園の　笠の　ゝく
夜〳〵芋を　笑ゝる　ゝ
ゝゝい　ゝつれ　ゝとゝ　ゝゝむ
行見〳〵の　木屋　ゝる
おゝゝ　ゝゝ　ゝ対の　大魚
ゝゝ〳〵ゝる　ゝる　水
一取の栗も　嵐　ゝゝ
八郎云の　今　べ人〳〵
□飯食ゝゝ　残　古八云
小鴨のかゝ　ゝ　猫の　狼七き
掃除て　ゝを　ゝく　孫の　鴉
白ゝゝの　ゝて　ゝ　ゝ　ゝ

ひさ　流
白仙　上垂　下垂
支絵

中下　有中
丈右
陶五
弘孔
正秀
孔
南枝
柳泉
不楽
両支
山市
右分
可及

カヒ

欣嗜の口ゝそ世いあちきあき　世竹
欣次方の舟乃むゝ　酪矣
門ゝまゝつ島みを乃寸舟の船　ま後
口ゆゝてゆゝ　ろ九
白　乃成ちろゝ乃の南　凡
青　托盞の口をゝ乃寸芝　白椎
有良

△欣お二去　古八三去

白多ウ　月茅さんて奈欣　友連　林坊
ゆのゝん面焼一月とも　世業
さミ　吐てゆれゝ奈ゝ口ゆし　ゆゝ
ゆゝゝんのつけ破る欣さる　、
ゆんめゝゝ　ゝ奈一ゝ　摩お
仮　ゝ之約の仮いゝあゝる水の月　林妖

△食お二去　日　多者

白多ウ　ゝさ嗜ゝ修ゝ商市ゝ柳ゝう　支考
ゆ　ゆめお　ゝ五殺ゝ　小枝
山　俏孫ゝゝる　次仮の船　友良

ゆゝゝん荷の肉を船の上　右範
南陣をやゝいむ又ゝ芝麻ゝ　ゝ欣
仮乃ゆゝ　ゝ乃毒の天下を平　友五
夕仮ゝ伊ゝ　ゝわゝ夕月歌　乃仮
ミ　否お乃ゝひて大ゝゝ　一ウ
ウ　ゝ五仮ゝ　ゝ春のまゝさ食　りお
ウ　ゝ五村ゝ船ゝ　ゝ之人の弁当　鶏
ウ　春ゝ芋ゝ　ゝ形ゝ併麺やゝ　水胡
ウ　ゝ五仮ゝ夕仮ゝゝ　ゝ宋ゝ　俳ち
ウ　月ゝ人の座ゝ　仮いゝし　船
ウ　ゝの船ゝ　仮いきゝゝ　茄毛
ウ　ゝんゝ乃ゝて　勝お　葉ウ
ウ　夕ゝの肉ゝ　ゝ未ゝ　原ト
ウ　つゝ交ゝ屋ゝ　ゝ多ゝ　白橋
ウ　生ゝ船ゝ　ゝ多ゝ　、
ウ　ゝ　ゝて仕ゝ　献　ソウ
ウ　おちゝゝ　ゝあゝ　み角

難

△氷炊食お同件城不懸
菜穀類お菜菓 粥煮麦 粥遊 豆腐
菓子屋 屋 食物 面炊類

ヤ
みそまつ 弧屋たくあん ヤ水
屯の沢栖のひしを持つる 羽
傍おそす 歌舞のし 羽屋

ア
阪嶮を往て果め船 風竹
る市の竹人形他のれん 昇角
芋い米うり八千 冠那
行くこ市する幸ん入 粥 覗庭
岐屋は新宮うる 寿の月 函室

コハ
苔るをくしは麻の寺 仕実

嶮さめ高瀬を船の後云 柳物

鮫
おくこ高の歌ら侍は来て 糸角
りの粥屋 熱田さう 山りし

キレン
秋うをお稲の初さうされて 杏英
茶めそのふ上口うか 尺尺

・新板の弓仏 生 戻 あ士
・雲人は食物 雲実義 浮六
荒利力ようる 毛孰
まるきは浮新の書ようる 花巳

主者

△炊合肴白
一ゆ 冷食を鬼一口は喰てう 似去
昆生減法生美物 義
柘 焼くる陸るの下の面 以言
砂糖の物を刃 ウ柴
菓刈 炊物 沖の者は猫の声 牧童
ようる 味方する夕阪の雲 浪化

吉色 阪嶮茶屋は新文名を文作は白三ヶ之
星月 砂糖は 茶ウ 法皆みさ ゆくくう
おは一ヶ 上戸下戸 碎 粉 物 面を
ゆく 新合石白は云えう 巳上 約文
▲ゆくくるキ角支考 設老の 鉢さうえて
二出を鳥 彼七は 何有二士 ま方を 有さるて

△ゐ　同川面去
松風の答ゑゐを吹そ一　宋水
哉て君と　ゐ賞ゑゐ　菊
ゐのむ焼のいそきひき　相坂
おおりゑゐをうる橋や
雪ゑゐ今のむゐも毒ゑれ　雪及
間ゐてたまする　桂沢　山り
△ゐ　高川吹破拾　重ゑかう五去
まゑ月の見ぬゐのゑゑき　東友
破て又持る山すもの上　菊
茅ゑゐ一先ゑゐ乃嘆　芦
九十分ゑそゑゑす　重　き角
名月日ま一ゐ　足人　ト宅
破ゑを移ゑる　作数　宋吉
ゐ便すむ旦雪月も来入て　勝業
おゑゐを見を茅ゑと　角
辞て詩山の　雪乃嘆

おゑまゑと去のゐより　業
和て原て　之門の　ゐ　末示
海ゑ筑波は持　お砂れ　女商
ゑ交ゑ　お砂ゐ　お砂家
ヤへ　お砂ゐ　雪ゑ　雪ゑておけ　示右
△砂　面去
立ゑ立ゑ立ゑ砂通ゑ後乃　保砂
砂い焚すゑ上の去焚　蓬舟
立ゑゐるの駄食摩ゑゐる　り雪
今仏清の砂いお　茎二
△砂素灵ゑかう五去
砂次ゑ大徒の猫ゑ砂生　左林
砂面ゑ会ゑる純みお見　禹院
月茎さゑて茎砂友逢　林房
さんを茎の先茎見ゑ　ゑ高
砂とゑる茎院を灵ゑ和ゐそ　古賀
枝木ゑ素乃て空の原や　橋茎

△奈 面去

正字 奈ナ 奈侯采する意も有す 面柳

奈ナ みくさなる○奈のうまき 徐末

ち菜ホ でむての用セする 旦井

奈ナ 用ホ 毋ホ 人のやゝ 寸袖

咄すあゝ ナ 菜を入てする 荻人

ぞくきの又 奈合て菜の白 風紫

狼ウ くれる 奈て菜とする 梅宿

彼ヒ ヒ のうちの菜い身おく 支考

奈菜ナ もちろと采の爪あり 除風

△候 面去

梅ト 候を 候の焼采 柏川

梅ト 崇め ナ を初て候の焼采 伯機

起 たぐつけぬ 見ひ候を 豊ム

候の ナ ムを 拾生す 作や 嵐雪

△采 面去

殘采をろと一匕奈ま佗て 牡笑

小妻天京 ヨ 采なる 左右 列字

候采 行ム 又 奈 采 ま ろ 許云 牡

たんくと 采い出る 門 口

△菜 菜 佗 油 青 ま 面去

梅山 ウレ 奈菜子の 合 芙蓉

百仙 采 面し 色の菜 ま ひむ 和笑

ヒ ま ム 百 ヒ れ ぬ 佗 青 李邨

ヒ ま ム 百 ヒ つ ま み て 候の花 晩柳

古拾 油 油 何し ま ま そ 候 ま 青尾

梅ト ウ 声の ま る 油 ヨ 抑れて 義

梅ト 青 ヨ たゝ ま て おく 青 抑 ヒ ム 呂杯

七面

△菜 菜 面去

菜の名代 菜 仏めて 松人

ヒ ム ま れ ま ヒ ム 分て 松和

ヒ ム ま れ ま ヒ ム 分て 松和

菜 名 初 ヨ 抑て て 刷 き 丈我

ヒ ム ま ム て 菜 味 ま 春 ま 寺

△陽　衣類

吉良　陽は汁は衣類云々おを去て巳あく〜

▲書門云々て二云の自花あり日州用えう

ていを去て面去てすあく〜む

白多フ　書州　得去て　陽上乃　袖　支考

葉陽する〜の仁も葉の陰　、

笑ワラヒ　古コフル　二去の陽は陽〜

陽衣の多の　搭〜　卯子　乙甫

和千　陽氣もきあ〜て去て〜色甫　昨ウ

陽の花あく杜の扇風　金花

辰　陽上に生て又る店の人通　相隠

扉れぬ日陽に入る来る　庭支

巳　去のくもり〜　陽の　山　壬辛

陽の山の生る日いぢのきんむ之　東羽

多　陰巳の陽ちく〜と一茎猪　る彼

吉良　夏数とおくと云くて一度一之

▲夏数い仍所は制ゆきや云うぼうぼ去

そ所あるもの中い葉子の陽そ去る〜

□衣類二去　吉良去　吉侯者　△

白　陽下てみ彼かんとる林の春　佐義

大口去る　夏の　去　掃　義

子　二十帳子の去ある〜月　猪能

夜去て掃る　ん　掃く　義

巳　振れて去き移百の白仏　風除

暖うるむを去い神義て　木猪

壬　春はけさや去る和の孩　る峯

狩衣去下初の尾一と頭一　掃新

申形の去おも　振別て　杉風

保　地をするとり四る多袖　りう

おりを仍て行て戻きあ　末隠

三　稿申上岳の春も袖ぬれて　知角

一本ま布も屋地は猪去引出れ　巴陽

又逆　袴上成て又る　孔　辛　一辛

△非衣類和戎不婚

夜昊冠お袴帯独り昊淫織お

一月　・紙衣たむ紙衣の花鳥　杉風
　　乙女の姿白梅の帯　風
　　・手枕は待の夜おもひ　義
　　天一れと歌く寝面　小枝
　　ぬき中和菓の古風之　義
　　・狩てあるうと　樓の行燈　相笑
拾　　・赤人も紙首しく　義
　　投るある一日織の一ツ孜　宋水
　　・ぬきよりも曲物する玉簪　茂人
　　あ　り打伸て陽る信人　嵐雪
　　きるおを作ようと一ツ紙、
　　・殺くくとて帯やたるあり　宇他
　　色　・田舎もやせて枯れの一ツ糸　我笑
　　蕨うの分の後に影く　り角
　　・ひんまに戸式の雪の帯　素後

カ　・ぬくまの月を門に拍　陸笑
　　・そ孫は月夜の辰　押拭　正信
　　・賞人の来れば和立の孔入て　麦林
　　下は忘れ和おを　舎楽
　　花さう乙の名花も山和物　茂林
　　△袖は二三
　　孤押絵き　壽の衣を　松市
壬　　孤衣おおりをの一白　ヤ　式之
　　月名はさひ孤衣　許云
白　　情のふくれて つく衣　仮村
　　△衣　ぎぬ　五去　古今白
　　義入の天の和衣稀に　周東
　　忘衣おくるまい夢　舎曲
　　久中みて初振衣杖の一　舎翠
十七　　仕る糸のうれ　忘衣　白主
　　きめくのそ振神忘れ　自笑
　　白きめは義と寄を却て　如風

△袖・懐　五去

一　手水桶雲の茂袖月かすて　杉風
　　春巾さえき袖ふ伝風ふて　、
　　つゝむ息のめけの袖枕　、
　　○帛衣依先〳〵　袖の　月　、
　　佛ふする和の中袖こゝ百　独径
　　○宮食ふ〻勢を代あ寺袖の寿　正東
　　もれて稀ふふ西くむ　袖　松ト
　　茂袖や情陰枝ふろ寸　伝徳
　　行〳〵袖のあゝ艇の町　乾士
　　形ふ寿ふ草ふある袖の西　庫此
　　一　稀ふ天の袖袖を五合手　吉此
　　信ふろ菜を袖ふすゝ　キ角
　　芭　講沢寸乃　俗の懐　思寿
　　懐ふ〻して俗ん考〻翁　家猪
　　△袋・布　五去
一　大恵の帛ハ花ふ稀て　住幸
　　土

　　ふやふ〻小称帛の曲る世ふ翁
　　死稀の布をたろ〻　みむ　許云
　　布ろ〻布ふろふの布の回れちて　、
　　五云丁布網布る東天ふて　めり
　　布帛彼次才乃妖の風　、
　　拾　多有
　　□吳葛材伐不姫
　　吳ある葛材〻お伐を彩する古式ふ苔乃
　　ふさる小るのをかて変化をそう寸
　　句　武士の双ふを苔ふる　杨水
　　次句　甘い布〻ふきそいむ　方凡
　　あちゅ〻稀のひつふる恨　翁
　　刀稀ハ男女の恋とする葛あれる許ふ
　　雪の狂葛の忘乃葛張〻　力兮
　　冬　名　カネ　衿ふ行袖をふ　翁
　　化人と稀を稀ふ恢あさむ　重五
　　けの一布ふ名を赤寸稀　卜玉
　　三月の布ふ〻稀の声　翁

●笑付　笠括

ひさ　ころりと茶筅の下に樵付　昌房
ヤカミ　作るをまる家巳口　正秀
ヤリ分　よきする憶一所に稜呂　及肩
キリヨ　お阪うする新店の秋　独径
さらりと切手の紙に風吹て　二福

△日佐笠付二去
伯笠　阪笠　乙呆　七呆　吟抱　乐笠
武笠　農呆　大工呆　高呆　萬呆　列呆
芸巧呆　出廼呆　搖呆

ミヽ　ねん征鼓にあの打篭　巴兮
嗚和　晩陰のあちこちに匿吉　同次
コ人　篠止て床裡も静る在禄陰　許云
、　　過ぎるのあれてもるなき征　批
ヤヘ　咸甫菓も月の率に吹れて　圓水
覃　　小鼓に足ゟ燈をおとひて　示右
ひさ　柳の姿る吊儒にやる　路行
高キ　いつもとて大揺さもおされて　秀

白兮　よしあの家と兄弟矢屏風　小牧
、　　川言さき仏に橋ばらと法　友彦
係　　経をする空坊の椽　洒堂
、　　寄にお乃む一揮乃清　文渠
了　　兄弟る笠にまりの風をし　年留
萬呆　更着るこのを捌分の吹乱し　柁呂
ひさ　粘徳きお乃さに小さき荘あて　泥士
卧呆　焚をまに枕のあとを搖重して　乙扣

△笠枕　去

いつさ雨あれば只そつめ笠　八条
山下　谷の戸出る　宗子の笠　呂波
　　　抑て杜丹に日を侘ふ笠　以我
篠搖　笠をそおのすてき百者　嵐雪
　　　徳りし徒士はろく袖笠　彫棠
白見　すゞ揃に笠を萩も行分て　甫山
　　　身枕にこゝろ子の族おぬ払　翁
ソタ　初参ん茶の枕に篠りして　、

集

次句

三月 笠

也指

集

、

夕

次句

、

一傘の風 ハシ

櫻泉

、

柳水

、

△杖・笠・蓑・傘・紙・戸 西去

杖の清水いい秋哉の外 一茶 独扶

杖突の音ゆきぬ暮るも 独扶

くまゝ〜さうた尼の汁哉 彫業

今ゆれて白れゆく雲ゆく キ角

小坊らを筏乗せ〜作傘内 序今

猫ゆ押くて極さ杖哉 朱衡

兄と一つひとつ〜成る蓑 含曲

焚火を孤独ふさく 園 紙香

死面蓑の紙蓑ふ蓑きを 羽

蓑侍の松の根の花乃香 、

蓑よりて蓑の竹笠 、

夫矢二郎迎笠の先 、

△傘・紙・戸 西去

舟傘の結乃時分もろ〜 羽

ろ〜と京一の枇巴を傘辻 木音

蓑傘持を抱の人と咲て 羽

寒ゆ蓑ゆ 独明

低 、

降て〜西玉兵士の傘の隙 コ庵

降ゆ〜傘の男の傘をゆく ヤハ

傘 、

松を蓑月庵ゆとゆの紙 蓑次

松盗 カミ

紙和ゆ〜ゆ面の日そよき ソ也

紙五木の紙を持る紙屋そ 天蓑

白山 、

時分ゆ〜ゆ紙衣ゆ〜 剛彩

壬 、

蓑庵の笠乃中の大笑 梅新

笠 、

ミ笠の屋風ゆ重く屋彩ゆ 、

白河 、

月清く夕ゆ〜笠の傘 佑蓬

独笠をあゝ〜ゆ 佑傘

蓑勢 、

山文ゆ笠〜 梅宗

笠ゆ蓑〜笠先 咲哉

、

皮

△口弓教面去　吉六百匂三

敷ユ一列ハ高ぬ揺さ一　崗寺
大小のもんておどす角九　口拾
きロ弓ユ肩休きするたろ一弓　ホコレ
花の供射ユを結作くらむ　去来

△陸・征・を敵面去

壬

秋灯を灯セと呂ひ陸の声　麦斗
明ゝの陸陸の月も時ゝ　式之

一橋

今ゆゝ初セのちの陸ゝとよ　丞隔
椹の木ユ陸ひゝくゝ　秀陸

ヤ人

ちの征ゝきゝて明陸　示右

征

世の外ゝ南ゝゝぬたき征　只九

岩多

日も入舟のち敵をよる　地般
風ユを敵の寄ゝ何系やら

△車　西去

下半なを橋ユ月さて　東李
年ユ寄をゝゝりの系　寺法

丙

車百匂ユ二弓　文門人ゆかる俗あり

△念・祝・渉・寄州西去同河打去

苹州

死さゝゝ渉去文よ苹拾　医苦
渉ちんの名季を俗と發河友

渉

今次の中寄を橋ユ廊ゝ　路笑
千念ゝある我ゝゝ来　年

永福ゝ英念ゝ松の風　仙化
河ゝ去ゝ念山ゝ河　朱法
生ゝ度の状ゝゝ俗ゝ　除風
ゝ月ゝゝゝ人ゝ去

△念・祝渉ゝ去り去

家中ユ念の又面ゝ拾　拾木
英男ユ渉ゝ面ゝて拾き　莫之
陸ゝ念ゝ去ゝゝユ来を入て　天宝
渉ゝ白ゝ苦を至ゝ　三姫
中寄ユ渉も寄年河俗旅　社去
祝と寺利寄の名のちを来　石外

△草鞋・縄・俵・網ヲ去

楷白 老皇子に始て草鞋有り 浊子
ワレ 老の草鞋のりん枝さや 翁
ひさ ○小寺招かる 在乃 縄 探志
大 おそき集る きの上蔵 及肩
敷 おつるてに穂手か縄行かけ 格枝
、 ○九 うろくを身替か矢く師縄 、
お ○よき西戸り作る菜俵 子サ
タワ 厚うる俵を古今令れ 八楽
ヒナ 席月秋干る俵の生くさき 子
、 ○俵のちりそてくさる ね 翁
棒 網の気幸かてるおおを 甚三
アミ 網の庭西瓜を井戸へ汲至 呂杯

△格・蓋・枝ヲ去

山夕 汲よえてぬ麦藁の格 白柱
タル 汲の子ん格か々ねそて芸いせて 梨舩
喜白 梲の子さ陸子の格にかさりて 系角

夕 一日の陰ハ地秋の若のふうさ 小去
句 青のたふのおる蛇 枝 糸細
多 爪若子戸格の上の枕柔 、

□出件二去

次句 天帝に月あを出て尖上 キ角
秋に対して不帯来る祀 大丸
之の 源氏をうつを手いかりて 半弥
夕月を扇に重く秋の風 三葉

△非出件初残不嫌

言九 ねく落ちおる松の木 一柴
星影る竪に志うる枯るを ソラ
・ 集す揉女の名をとむる月 翁

△集冊子詠め句より三去

次句 近白荘を以てうるくし 角
灯ん影を詠しくむ月 翁
詠おく月う株萩き賞 梅水
、 蒸渓の子る軌を設る 九

仁言
寒墨
角
拓
你
茎
山ト
要
徒
与

△文部省状ヨリ出ス
状の返りの日い書てみる　弛般
ときぬくの文　八業
頃惜の文すくる秋月　支考
頃風
ひせの状日乃南しき夷　去来
ひるそやる　お役の文　信化
ふれの文を行る村ゝ　蚫子
返りあ　嵐雪

△状・文・れ　面去
支考汲面去あり
孫乃を書て状の乃不　有琴
返るの内のもん状宿　茎二
苔通ゝ似ぬ状いを　白粒
鶴状おて行てみる　栗ル
文乗て乱ちや色の指考や　吉成
寒ろ紙ちろ文を残てひろ文　又吳
文

言葉同ゝや秋の家の集　元梅
まくゝ返功の賛の二行　青原
状木ゝの多ある方の先人此　子結
寒仁ゝも揃ゝて意の寒　宇中
△行寒連他文ヨリ出ス
秋の比旅の巡寒ゝとゝ　羽
麻ゝとゝ寒の集あむ　、
ゝん伊ゝ子白の他社ゝ　ぬ行
ひゝとて寒の寒ゝを　独不
状地ゝ賛する賛ゝを　杉風
山の内行の寒ゝ考ぎる　石考
寒ゝとて女ゝ蛍行ゝ　羽
尾仁や独杜徒を使て　竹偶
行ゝ仁ゝ陶ゝ和れと云の月　呂此
連寒の寒ゝひゝん子指合　考依
法陶ゝ書て撰集のさゝ　許日
仁ゝ丘ゝ返乃ゝの寒ゝ考れて　甫什

コノハ
下ケれは矢の極る事の月 開拓
禁制れをめくる乙ら 重宝
△雲。後。墨 わ去
読ホ
ウタ
月七の使を分る身の云ひ 秀風
れ旅五の子雲神しいさむる 不ト
雅
ヱ
後よく降る降る雷める キ角
一又反
スミ
冷命の後る夏紋を考る 、
力を墨を伺を恨てあ為 似去
茶小孜の和歌い墨を降ひる 翁
□美大伴 二去
苔ろ〻横灯のおそて二去を詩う 六月氏三去
多
等の烟ろ〻暖字の 紙 望翠
楊柳の書家を かやきて 翁
拾
地蛮大を逆ろ信の毒を 竹猪
ミ
去て生手収の 焚尾 、
灯竜い皆利し 山り
わ付為く沙を 記水

かも
灯明の火も人を けさ中ぬ 素後
焚付て 奏ちる 家の 墨奏 竹
一猪
七〻日を又ぬ 弓の 灯火 信風
木の弓 仙蛮の烟ろ 壱て 一晶
三花
ちゃくと 弓をあ ろ 家焚て 残人
陳子 明れ 清る 灯火 竹
△同大伴 三去
あ〻
ク
山お家の 烟る 秋風 翁
火を〻〻 教を白髪 て 不ヒ
拾
ト
花栗を 后の月 弓 る おそ 猪 嵐七
初茄
、
宮 扶て 食て 舟の夕 烟 長天
一ミ有
、
開闇の 天地 形を 大砂 拝 杉風
ル乃烟 果い 食焦 翁
月 て 灯火 毒き 海の上 、
天同
拾
托 灯を 大 桶 烟の 言 烟 去来
灯 竜を 存在を 秋す 長陵家 山陰
ま〻 明んの を 明ん 挑 灯 山芝

△非大・件お伐不堪

焼矣 焼矣民の竈 打竈 抱灯ト分リ

打の新所き 甲 行 羽

白

山時ら 山を 出る声 許云

咫迄あゝの白焼許されて 酒屋

山風よ大の用へも西え唐 栗ル

寄

矣へ男ゝきへん 幾年 六芝

焼矣の皆ま抱たびの狂 甚二

△大・烟・焼・焚西去

廓 大

大をけさ新の時き 唐 重辰

大多の夜の打夫 新唐ゝ 知尼

業彦

埴烟の大を焚ふ夕月 正秀

公ゝ焼よゝる 伺の 灯大 卯年

張糸

青唐き抱い生き舟の大 勇拍

ゆゝ大ゝ大 大夜の頁 侯石

ちゝ出る 稀の 灯大 去束

拾

荒よ大のする舟ゝの小 焼 蒔徐

町 焼の 挨 抒 陶て大ゝ 焼寸

焼ゝる 扇 寸 扇 寸ふ 投 や 大 知尼

三良

扶 字き 松の 仮 ゝ 焼大を 焚て 不有

行 恵の大ゝ 供 出の 内 れ 色

廓 烟

ゝの 新の 仮 烟 ゝ ゝ 赤伝

ゝ ゝ ゝ 焼の 烟の 白ける 辰

他 学 ⊖ 鶏て 仮の 焚 焼 ゝ し 羽

ヤキ 実 や む 白 寸 矣 ゝ 焼 寸 ゝ

焼 焦 ゝ ゝ る 小 つ ま も み 等 、

白 焼 山 焼 の 字 き 乃 赤 元 嵐 元

咫 迄 い 寸 矣 の 白 焼 矣 れ て 寸

後 柄 ⊖ 宋 焚 矣 て け も る 西 の 日 二 竹

タキ

そ る ゝ ゝ ゝ 食 き た く も 唐 き 支 考

拾 矣 焚 捨 て 乃 え る し 嵐 竹

生 木 を 焚 て あ る 矣 の 日 盛 水

、 宮 抒 て 仮 ゝ 舟 の 夕 烟 昌 天

絮 小 仮 て ま ゝ と 絶 屑 ゝ 東 羽

、

□奚色字找不極

白川石の色の奚ゆき　仮村

竹の子を甲斐の国胡瓜朝ア　橘本

宝玉の絶うまきまる　水青

白青ゆ小信の白玉の玉を　加反

宝も久瓜の青屋の苔　丹之

あをを黒木ゆむを載て　開十

面ちまの花も白き夕香　安閣

舟大ユ色ら拍子ゆ拍子むむ　新波

宿の形見をあつる黒翁　新波

△青英赤白黒各三云

妻ら又の白髪を乳を至て　口面

何ら何や妻乃　白雲　咲山

小萩ゆ木の白ゆ白ゆ　六

匂

宵

月

読む

妻ら秋

白

ヤワ

、小山の白ゆ白ゆ白ゆ白ゆ　玄来

、雅　赤の白きゆ白ゆ面の　ア船

皮の皮皮ア皮の白も白ゆ　キ角

、岩ト　さゆ花の絶ゆ絶ゆ稀て皆白ー　宮青

、恨　面面乳の白ゆ白ゆ面白ー　林和

白青の稍ゆ白ゆる陸の糸　松宇

面白恨ゆ今青只陸り　赤雅

黒谷の口も黒腰変後虎　リ牛

黒名　人のさゆ白ゆ　松黒もし

、乃　ちめきの母で　コ反

日のあゆ白ゆ赤ゆ　、

サン　陸ゆ田の青や白ゆ　九北

アチ　黒紙ゆ青陸の外の白ゆ　箱

△色立一黒一

赤坂の名もあゆ白ゆ白ゆ

名乃ちや白ゆ白ゆ白ゆ

ヤヤ　黒を色黒と白ゆ白ゆ白ゆ白ゆ

[illegible]氏分合の源に基き[illegible]
[illegible]

油　秋風や吹て寒し　洒堂
　　伏て白れ〜橋の下の浪　祇角

白見　人敬の招信白〜と明るう　嵐雪
　　寒菊の花はこぼれる　和哉

枯　新年うすみりん酒の酸　之乃
　　白雪の徒を苟も寒に折せを　探芝

浪　白矣の実面白き形狀紙　何由
　　雪舟い芳〜て[illegible]　[illegible]

[illegible]面白き形狀紙に余白[illegible]
[illegible]

□亜字亜語

一字を亜字に数字を亜語[illegible]
[illegible]

[illegible]るもあれと白拍子[illegible]
似て[illegible]
[illegible]

[illegible]より大概[illegible]文通
[illegible]氏分方[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

皮附　蓬の柵木よ[illegible]を眺て
　　寒のあり花の[illegible]
　　二月　上法　木因　[illegible]

皮亜字

花陰[illegible]式人の分[illegible]考文字定[illegible]
亜語[illegible]文と[illegible]

乃ち物会及匹敵して侍て友言此上者
古来一段おもしれかし市中宝ノ人言ハさ
俗ノ表文ノ四句を抜て俗の宝軍の歌集
重宝ノ宝ノ文字の句弧客ノ句を和せすして
花客ノ上ノ句あて是の句を掛ノ住なし
其古来印　菜園集巻七去他世者

蕪の柵木ノ者のみを脱ノ住て
きるとある花の柵家乃おるとし
木をワる斧のるそ少四る

二月　下伝　　木因

▲只義のもの付を言ノ感する人もあり日和の付
俗ノ人もあり又立場ノ乃を張ノ侍ノ人
もあるなノ木因のムを引ノ又むしノ文面あり
ふかく義の物を抜て言ハるるなる鄙亟の俳界ノ
はめ〜あれとむ〜とふ言後ノ

はめ〜と引ノ句の四乃の四乃の異
東五　或い俗句ノ言句ノ言句ノ言句ノあり付合ノ者
俗ノ付るあるもノ言句ノ言句ノ俗句ノ重ノ
俗的の拍子の表あるく
俗句ノ言句ノ言句ノ支考俗の俗ノ俗きよ
ノも俗的の拍子ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ
抜ノるむ〜の句句あるを次の俗ノ付ノ抜ノ
さ〜ノ人を押る句ノ又ノ抜ノむ〜ノ抜ノ
お役ノ乃人あれい必俗るかノ言ノ付ノ
付ノ業ノ句ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ
て付俗ノ付るあノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ
九句を言ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ

分句

抜ノ俗ノ拍子を付て付俗　友五
さ〜俗や言のむ〜ちる月夜　仏笠
ふいびきの言の俗ノ付ノ付ノ付ノ付ノ付ノ
をひく抜ノ又ノ白ノ抜ノ言ノ抜ノ付ノ付ノ

京白　佛〻うゝ和細白の雪　乃九
佛〻さん柳葉〻と枝の風　屋庫
雪の白拍子を風の伝さきく行くとの雪屋と
又ちて茶屋舎を思ちうり佛されと押
うゝ雪の佛とを一倍する一体の付方く

和び堂　都よ砂ぬ赤ぬ人の山あり　飛え
山ゆよお母付て思ちよ　玄殺
雪い赤ゞの花糸を称する白あるを次よい今の糸
よ赤ゞの糸を掛る居宅の第山と称ちう

字花　花と九を花に三ちゆ　り中
うの山掛〻とうる　掛　許衣
雪の赤ゆい作の欠合ゆと次て生の赤ゆとちう

文屋　ゆの色のゆの掛の〻　孫也　八川
ゆよわる付ゝ名さ地蟹子　賀舟

山ト　名月よ赤の掛やゆやゆる山も　泡次
ゆよ千枚の山よ乃果　甚二

色の掛ゆ紙衣裏と云て僧の白と思ちう

三千　山花の色ゝ〻ゝ三ちの山　忠士
山の掛も雪い赤ゆ　二
色赤の月ちて山字を思ちう

□一字一点

常〻い出家の子を思ちう
菓子色ちう称る孫麦

京西　式宅の付白て化粧の迷ふを赤尼常〻。
と云ふい出家を成て居ゝ常〻ふと云て出家
よゆめ今ゝゆ〻ゆの捨て乃玄沢生の二ツ
あり依女人の出家の色ある子を知ちう釈よ
阿子子あを又ゆるゆ居きをとちふれ
友達の知ちと尼尼菓子色と赤ゆと友達の
赤て拵ゝ知花ゝ色を三法ちう称ると玄友
拵菓子色ちう似合ゆれも赤白よ出家の色を赤
ちう赤人と拵むとて菓子色と思てゝ知て

付句に一字二字もおかるゝ事一格なり
世の人の付句に成ぬるとのゝ人ばかり我作を仕て
句を作れば一巻に結離しくしく迄其の面白
▲箱門人の遠忌を訪れる付句に九二句の発句を合し
一句の句拍のゝを作て付句の微中を和し人格
あり年よりの所の発句あむるを重て微中の
作よりは句を破しに孫子龍のゝ作に付て
出来ず後く句の作て事の中を出き作し発句
事ゝふとあゝに又いゝ句あり付句あむ

切灯の火口を風に向て
ゝるは戻せときるあをゝ

[発句五] ゝるに門口は雪を掃て掃ゝ人に雪を掃ゝ又
庭に家根の雪を掃れば雪を戻せを待
あて庭に立ゝるに伯母も嫁も又ゝ
切灯の火口を掃ゝ向て
童子声をかゝる小使　甚二

掃ゝとする時に家居の張紙雪ゝあれる雪ゝ
よ掃雪て掃き寄て雪をどの雪に風をひ
て茶釜の口掃ける雪を吸ある掃ゝむ
▲コハ先白の風よりゝ掃くゝ元事て白浮を二付の
お白と布に出来ゝ句を字に合て出ゝ
ゝるは出る子に嫁の乳も智
市の使宜の七〳〵七夜、

[発句五] 出る子に嫁も大九ゝ乳猛の口ゝ分に入
左ゝ二三に陶る七市場の町をゝゝむ
丈孫今に天宗の伊達ゝ立ゝ丈市の使宜
ひんきゝ乳をゝひ指をゝ人よ
産ゝよりゝゝに嫁の乳智
旦那丈乃お陶ゝゝ、
やるに嫁も十二ゝ丈ゝ立ゝ陶ゝむ
社家方の手季産ゝゝ雑のあの黄おゝゝ
左ゝの麦飯を焚ゝて母ゝ産のあゝ指あり

風呂敷を所望のておく宗の下
振舞い之き老侍の喉　茗二
[続五位] かく付侍て所字指合あれ拵て書き
ひとり〻指〻付白の人大き書へ〻とて
風呂敷を拵ておく宗の下
吳人をすれい小役まろ、
茶の所望て二三も振まある人て用人侍老人
侍の拵い所く振る今者まを色まき吳人も
さるを釈人のを〻〻〻矢指いのる中宗切あ
か指れを知たる〻の吳人書〻〻るまい
釈まも宗〻と守まて小役まろ
〻て友の五時をてりと二の後明文約
おちう〻月下山博も天重も
笠為る〻たを吸み
[続五位] かく付て文もち山教出も円〻る
仍今吳ふ天まくと宗まる書〻いとて五

すまかてお字の風情い付侍〻侍も
釈宗の釈まて
かく〻存ちの留考を久云る尽るお字の宗明
▲コハ和尚の釈をの使て ちい博小の釈新を教
付白の侍「東西釈信羽弁慶五位まる
あ〻　入以て兵部町此新保〻　兼何
宗重て〻りとみる言田仙　泊言
為白釈おの侍人乗〻吉為宗得を信守
レ、　くぐまて兵部町の正木拵　侍言
白の為日を侍屋敷をもし　文志
為白拵の宗〻永る侍ある侍を文内の守和を
付て〻文庭河もし子日和宗拵て拵ふ〻し
笠　兵部町。杉乃生　拵　二
上まを柏まて志〻〻藏の吉　拵孫
為白吉〻る拵の拵を通の人の宗侍る侍と
て。字の金侍を九　正常拵まき拵を付て

ゼラ　紙燭て二ツ上る不用ん　り与
　　同座の侍ちくい多之　其為
あるおまえを付る侍と云て制する用を付こう
シ、　二ツくい紙燭灯て上寺　り兄
　　恠気の中まちて在ム　若推
あるよくもあを恨る侍と云てわく付こう
　　借い三寺を座る次食　り和
棹　　仕え口の侍も大方明らう　梅光
次食ハ侍ちの伝宅ニ不用ある侍と云こう
ゼラ　　望ちま三寺の伝作る　之　五琴
　　欲情の多い高牧ち二寺の布施　和
絶る伝客座の侍こう望家の人を考て拾ち釈
ほのちく物侍ちまは来る侍を付こう
拾　　侍の紙ちよ屋敷さ等　紙明
　　あ一ツ云こちる　金伸明こも　義
サル　　侍の紙ちまは為ーおく　、
　　冷き甘のちこもちるくて　去来

サル巳、　ロ下ろの手人ま思ら九くわて　義
　　おくく中まつき点ち　盛水
　　ちこん九けてあ見ある　義
炭　　不命ち侍ちの中のつこう　水
　　□古与再用ち紙孔変換時い不若
　　去考こと拾ま仏千の宝貝　蔦格
　　風引ま声の点ー　茂人
　　何ま云こ人の夜ち　義
　　きぬくや金ちそくあてやる　、
　　風引ちくく声の点ー　人
　　ある好き豆の孔ち寸こきぬ　義
　　芳くくさんちや　吉　東　素行
　　ち風ろま二人て入る紙合　去来
　　こちりと明る女戸の寺　風呼
　　ち考反いん　成　人　来
　　二人てあちまつる紙合　行
　　侍ら明ちこちる反ある　吉冷

二個等度の万付掛し仕合義の比を文作よ
用ふる付掛付に掛る無効や人し
極業あるめ大工のぬう俵 支考
句を十度付ふ自然あり文付に又
すと云ふ変化する自然を吹く
松青 蕉の〜〜〜〜風の涼さ 木因
コハ百句ウ花ノ机事の白才一老より才千を
と皆句を用て句を変化し掛る
手付同の此のちろり〜〜と句作て無
山妹居れ古社の句を待て以も考う新
する人もあるよ〜 俳るるまるし

□准付 七ア者

准付に人情の句一山川生植降屋木の系句を
て又人情を准て付るく句の次に又准
句を実系の山川生植降屋と又立て又付
する事句を付る実情く表准の意を

再考る時に又情に表句を付て変更する時
ても中の准句海を矢て理屈と考へ一句の中
五七字の准句あるも同様に句を作る情
に拘す又准句の次系にある句と考る時に
独変化すと人情に「の字掛の弁まいる准
云の接打も只又系句を考の句に考て掛セ
よ此モ「三の字」意を持る法の舟の付 桑の付及巳
下の弁モ古あるに同一さるるに系の人と又
云を見て付る時に成と同情るり又云を持る
時に成くまある有る実する完する表ア一セア
此人保るも要弁〜これ立て変改セよ

帳夷の舞声多き情を意を作て 箱
菫 あまと句すも袖に落り 東夜
木のうよう西に仏事の強白く 工山
句に意に泥る情をもて意とハえその用く
次に又生を只侯人の形と又世情に撃れる

次のそこの第の七言絶句も乃至絶句なれば
なれば白は侯の振ある所は只情のことを付さう
初月は和名の如乃新月 知ら
酉 月は新〳〵 桂 袖ひく 義
野蕎麦つきの清の窮あり寸 立春
悪情をて新抽ひくと行通元の桂を付るを
次に文情を捨て花桂のそなく情の事を付さう
蓬州の名るかなる意をて 末秋
枝くろ悔乃 明死より 義
巳
月なれて石立根まる風の事 立冬
切る外情を捨て只情の明やしき桂を付さう
情の花も出代はちる 牧童
中宮は意のくる意をて 住吉
夕り 生岩の明の 泡辺り 鈴皮
悪の中宮和の中はやとあき人と契を意は代
さう次に文意を言山はの意は新て渡おを記

さう情の泡辺るとい情の実はめくるるく
英の詠い 山はちをを 吉
木尾はとい加は名花て 巳兮
山を英染山と又村をを加の名と新さう
余情に木部の早年さう文浄を実捨
因云を立起情の白とおるはある花を風月の糸
おを人とえて侯は文人を付るはあるえす
起情はもあ只昔文はあき付とおる人はある白
花を風月て人情を渡て付さう文おるの
人情さう意を事る所は中れも只花を月
月の白人はを付る時に文情は注事の付白は
て只人はもいもはえ寸 去くて中
おるくい渡付の侯は又渡の戒い 姿は情後
に蓬乃主の侯を勿付に侯を自乃ま
文契白 花を振けい節に秋も恋て
姫君は口さと侯する寄絶板

コハ萩萩を擬えの題令ハ拾えて文用を付
き仕志のいさもあると姿定情後ハ正風の
脈まて又る時ハ只萩萩のそゝく施えかゝ
とる拾ハ中ゆゝ成ハ成ハもおぼする時ハ泥ゆえ
とりまもれの爲あゝ

相よく分新も冥加日ハ暗るて

コハ爲を取拾の男ハえて文書の情新ゆあ付とそ
情ハ語ゝ書を泊まるの旅人とえて冥智の
吾根ハ泊る件とゝ心ゆ拾ハ手只白面ゆて
とく時ハ考うゝ人の文冥智とそおさる
拾の付と中ゆれと文も爲ゆて中えあゝ

みゝ猫の白ゆまえ一ゆの付て
情新考ゝ尼の嫁を面る

吾を取拾の文ハ情新ゆあ嫁を姑の吾手る付と
を白面ゆえゝるハ尼ハ中ゆ只文意ゝ来ゝる
の猫を撫ゆ中面るゝと考れて作ゝる拾ハ中て

付孔怪ゆゝ中れて分る付方の根さゝ清林の
吾通ゆ新ゝ文次い尼の奇門ゆ考のお拾ハ
ゝゝを「奇の拾ハ文作て況拾ゆゝ文考ゆハ
文孫考ゆハ又ゝる吾通を尋ふ人の業ゝゝ
いゝゆる国孫ゆやと必尼ゆハ文待の人ゝ

「一」情の白葉方

山川草木ハ情の白出る付ゆも平ゝゝるあらひ
おのゝ新ゆ尼拾ハ振作ゆゝ付ひい拾き限ゆ
ゆゝる新ハ文考ゆの拾振を中ハ不拾ゝゝ弟
根次ハ明ハ考ゝ吹上の新ゝあゝ中やと文
情ハゆゝ尼ハて文ハ尼中る文人文用を付る
時ハ一字一点の重ゆゝ子尼ハて拾き付白出る
ゝ拾ハ祖新ハ「東面尼の一部も強ゝゝひ人い
風拾ハおれたゆき時もあひト空ゆゝ新て
情の付ゆハ一ハ中ハ成ゆも出るおゆれい先
拾ゆを見尼ゆて分けまゝきるゝ

夕日の影を傍よりて　りゐ
初熟の梨下い月の市立て　巴国
おとは田の夕照をうけて　丁列を乱す殺集の姿と
考く指示の夕市の旅を分ち　七月盆の保ち
何多くれく宴は暑す

七月者

□軍の地獄

生世軍の仏は一白出る時は丈次いでや地獄形
成おく云て赤の白振る拍子あり「因縁」
出芝居爰おく来もおきる分るを変化と
んの重さ丈人のんの白おくいられれ
さ後白い教く考るおを分るとの通るれも
おるを恐怖せ拍子仏の白は教きるを出
む仏令白面い教くも云て中く時は居白
は養るるい丈白を作ぬ先う初るるく
付白い志あどおき拍子丈白拍子て活き
るを三白踊るもあり又一白てやむるも

れて丈左の除機左変こ軍るるして忘れき
るいあ寸えより仏法に世まあるるを奉
踊てそ中は世情の左理を汲まおく付一大
るを初る付に一者無写るるても意ても丈ま忘
は考くるるあ喜哀楽の中は人を風流して
人位の左を考るは丈は不是あるるを地獄人
軍出おは法の仏は作寸仏るても曲芸を考る
白を軍は仏の地白は足変るるく強に軍は
ても作世の後より足る時は忘れく忘くとも
丈軍する分まれて考る時は考人の仏位左臥
は兵るるるるあ〜ゆ氏おを足ちを地獄の
事考とりやくて孰向は軍生のおを求てる
情を作るるこさて曲芸の無考る時は地獄〜
無考さる時は曲を踊れは丈無考さる白は足
彼て地は次寸は白の仏は考く不無の振巳あむ
氏一軍は教て変化の大有白毎くのんは考

ま あるの気を傳ずれば千あるの気を被て他の旅句を付るなり

我あとうとも江鼓お来る　嵐ラン

ほ　山伏をかりて寄る関の声　翁

千曲　還おもかげおもかげ　西吾

古往今来武士の情を忘れて或いは門を出て戸の中く入さる山伏の白を翁生涯悔ひ底あるなるべく侵夜を成さう七アよ集い俗人のおもかげ面い

海ん海よりさて山伏の白い御宅実の文句よ

時るも山伏をかりて寄れば伏えるを次

ゑい大口所の人を怖す性と又て文盛の性よ若

合る潜船の句を付う文新の性友蕉の集

みるをかるむと戸にあそびて明て入只今関の

おそて山伏をかり教ちうアーさもきるかと対を

寄て清兵衛お食する猛病志の俗〜色を変す

る中よ一人の活人おそて曰我い先より文関通て

伊勢く参むと思ふかる諸きよの中あい還俗よ

るもおすてい通れまきやと文盛のお抵をおける

ま彼大口所も怖るまろろと実出りあい一度始て

戦おるるを知る猛寄よ高実の大手とふい

「刀さくまいかぬよの中トする外い名を文侵よ

文実ちと者のきを御る実地ま陸て他世体を

矣ゆ還俗の漢ちて恐怖のるよ合さるい

城を入る陸宮の風流よりもをう〜是大ちて大

をけすとうふ物術く或人難旨差還学指合あい

物何言曰「るよの〜きいかぬよの中トセ再

難日世の中も指合ゆいや何引りの条六稿乃

伝ト云下ま答れい雑去始て自立を舎ひ〜ぬ

夕りと　灯す合屋の照　支考

俗人とある　祝の力寸　南木

立衣　ま　とある木張ま一杯の友　考

千曲　かくまう気孤て月陸て　木

氏隆人の歌ゐの者は平伏して由良を何二張勇
と氏白隆人とある故ト云ふる上て撰出の
情殊さう実よきやうなれ共其隆人大死あり
を氏作者の力にて刺客を送る明友の情と云ふ
一格よおを情せるに有力のつさに次に其因を
月ふ人を生きおき法是のものを見もへうと
作るに又一層有力の曲言に

芭蕉　風は月をおくりの対死　相原
ま　まえて朴の葉をを引接　叩陽
是出是の人生て故四方の和酒

松逸　宮方の軍も尾むちりしよ　只州
ま　今青八月十五夜の月　山宗

時世は五さい法要宴孫の中は今青の月を徐
のそむおをし盛養の歌多れ白面粉く云故て
却て哀傷しる頃耳に仮撓粉く去吳傷と
己ら粉頃ふう名ゐのんをそうに加きうか

残　万揺至て小仮よろう　を角
す　ふりぬ也田うふふの言を振　支考
大ユう二人　恋五あるよ　た明
ふりぬ言を振答て板返の保形張と人
て大ユと付う白面に呉手さ

水仙〳〵　松乃出　雖　林和
ソコ　武去一緒又返る博の時乞　詩徒
千　耳よ見る俳古ち乃う　考
是討死と見情しる其坊よ　言考歌起の付
ハタ　伝玄を始何れも我をわて　寸昭
千　言流の変　尾法大根　乃高
苔の耳玄を花のあきるるすよ　小田原の進
和と歌向を定伝玄は尾法大根をもう是
ねすまち口ふふ我をわるまし

杏　むしむうは成て月うく　小枝
茅州　考店を変て出る母衣武去　万子
千　誰家の子そめ手の花の附　考

田夜武者を矢男と入てすりあはいふてく
軍する人のムまてあるを云る時に兵庫の用出る
おこ敷て付る〻已を捨て入さる時に成多〳〵

△軍手面去

句面物き倉の軍手敷対城おはかりて
い立去三去るもあれと云合て句に云
まる尺弓てしき句あ〻二も言用

焦 ソ 捕まら彼ら門の楯、 キ角

和の別の貧の手を垂て小西方 弦 於

サル フ 除の柄を立すりる花の芳 去来

已よりも対人の使いあ〻 ソラ

一楊 カ 新形まれぬ敬を世る歌き、

いき〻と軍まるある新芳 嵐雪

歌よせ来〻るむ松の声 千り

百 ソ 俳不尽まおく武士未七陣 芳至

因云りいさむ 金山ら何 朱弦

衝 父の軍を 記紀の夏 義

侍の仮屋より 巻を作る 荘 あ伝

次句 武士の双手をあれより 柄水

血祭の森老あや悪ふむ 角

秦の代に庫の町と戦し、

他侍ら 徐庶老の面をひそめ 昨年

昌文彼ア矢庫ら 子去

徐の楼より 屏 荷ら 糜柳

一ソ 史付のみち捕れら 義

寺の山乱て武士の世くり 似去

△教伐の句仕換の祇

日午楊寺ら けり生ず豆の映 朱鷺

材布くるあ 未ア去二ツ 不角

寺衣袋の 寺 仏 俳 終ぬ、

根は宗き源忘と 楼

必猪侍あ〻 角

痛日を云てひろと 農生、

材布火消の付いろ句まるを一句まるを寄さるを一人そて二句付る上まる五度句も同作者そて俳まあきまゝき死句を付ろ不角い箱屋按の人あるよいあるる我人あるそて又朱拙ら葉の拙者あるいかる付い再文すまきを集つの大宮あるる一大句も高すま各高きるもるしい句差匹句かるきまあるい一度い文て後句ま活を拾す法あり文活とい材布の白い田舎ろ雑穀の出笑へて箱屋句を入て山手の茶止役人の法て禾ろと耕ろるまい茶屋按ちて材布の淀目まこ二ろ引門又ろ伊と又ま外ろ月付の舞をすきを句句ゝ作てをゝまろ拙さゝセ火消の白い煙を茶坊ろも臣ろる勇士と又ま漢不ま義を思ろる猪の内句ゝ付て敬も侯を寄をまむかるあゝい付方我節もあるおし

□死活

都て句の活を逐て付るをおろの序に天句ろに死句に理屈に祇ろう芝居人形の松ろて考る句く宴ま文活の伺を奉て死の祇い文中まいて

新の去ろうて悪き小粋　白雪

奈

さく花ま猫子のさらを拾あし　朝年

おろ九　いふま人ゝ拙入るを我文句浮まいろやち山を子時かる幸の疱瘡ら大神牛のさらを拾ゝりゝいい箱い伺の笑ゝゝ文を知ていきろやと文伺を文伺まかい作ま比ぬ我文時ま付付を称て他ゝいかゝおるの人を捕て文ろを恵ていおやと文拙い我て持れすあ乃さるのうあ句箱の付合を入るま十ら五い文拙ま勢句日文ろを中すま箱の子る我と他付ま拾てるろ二ともう三ゝもあゝむ門芳の付合を付ゝゝ文その集を入るま及ゝもと文を陸れ乃箱と云て機孫の時ゝてい決て寄ゝゝ　的文

かく已に式を出て付えの行くべきを信ずるを者
れ皆後世のおくれとつくさるとの後の和の在世す
かくのごとく学者実は神祇を存ずる故に
を人々の付或らく文小解の疑を換えんの理屈を挙
さるあるは何句分ともつきりとむ支考らの只会会を
まて文句は似る故ヒを義い文疑男を出る云と
えち文出るこの用をさらに掛と新向一新の微懸
る物ずと白作ヒをうしの金陸を石海の工夫
聞る故あい花字を入て文作ずに作るべう九
付句い取るやうに出する附い変化自拙ず侍るべ
梅方の法はモ皆沢まあるきるずえ立るるべ疑を
姉い者句を母まるて己ら理を己び死句べ
いる在疑くとる目ず文人の行を見る附い移する
るもあ心を付合の活はりさるず白言松解
高九後水をもめ後る字一許六を式対い義も
表べ句きま作品を分れるまと皆後世と思

みる故ず式対味の変きい後新の和の時きまと廣
ちず字れ〳〵文人の疑口ゐ〳〵生涯表ら見てるるる
殺合く支考を作ら二年ずと人西後ゐ変
前ゐ変の情ん疑類ゐゐを出換べ

拾

小性 後句〳〵葬れの中 嵐雪
丁寧もるずよる つき杖 俳 義
実ず後人の指を分ず死句とゐ〳〵むを只引出べる
列と見て俳杖を止〳〵変之後の新れゐむ

きキク

押詰る時立の口を喰るまて 義
作ず作を分て性ず立 俳 ヤハ
実ず文実の指を考ら変の考べ後べさるを立を笑ず
言物枝考ず男と見て不後べ

其他

郭嘉生捕れべる おゐ イ拙
衣云べ〳〵いゐるき考句 戦人
実ず不字この意を考ら死べ御只皆文我ず れ云の
汗拭てうるさきを厭べるずまを元年べる不後べ

上ナ　木俣伯ちふ池を立する　如俗
今義も弾き言ひ聖の勢の月　ソラ
宮は不良のムラき振の情を行ふ死之木俣の不孰
走い世至と元拵其伯る情を考て風雨の活を
分て拵方伯拵拵方向を行ふ為ると

タテ　何為る人の良者と分を下て　嵐ヲ
勝る為もい頼り候様　峰山
宮は逐懐の事い死ぬ以良者何平の用ると考て
拵れの供と元与其拵を抗向一矣を立る移る
者を思て家侍の拵を元与るいと良之

ホ　今川の赤　ヲ
移り後拵の風をまと記一　浮云
宮は浪人壁妻の情を思ち何を分るる為の嘱し
奴家の子孫いある志ありやと考へ古了後今
る結る移りの逆者を以ふと作者の伝力と
フリ　拵て来る茅も拵ずして　涼ト

拵といふ〳〵才ない十人　蒲右
宮は妻を考い死之茅を拵て立双拵すと何人と
考て名之き聖と元与拵て来と多人数の拵れ
も宵病は茅る門人を抗向て臣平せる作
ふ了義の十拵死て候寺今氏信を拵ひ
七ア者

□二句与の法
古は拳ふ平以逆当の分れい大方の人情
武二句与す武すぐ〳〵ふと思武ふ句之氏何
多く茅の色の曲者はあり九おるは文寺おか
きあて情句は敵向のお拵を含て分ふも一
情句は含るお拵をお句は含る時二句与ま
句とあれいよく高る つき分句之

ア　位拵は化ふ程表て　云
庭人の宋分以て　は合与　り中
お句与の拵表する情て拵お何れて序程
を表て喰ふ〳〵ふと性子体と元与文性まく

歌て世を送り七人を分て山庭牡丹あるあり
其物を又連て義あるふくちゐと来よ用あり
と云一句を作字ぬとよされるゆゑ世れ又
山池を弾生るに呉すべき百連と成句
「庭人の子合点て男ゝト作る附いをてる
庭人の子分ゆて考ると大立た友形仕人ゐる
別業の百ゝて百ゝ上よ宴まゆに呉
白は所る作ゆもむに句の姿ちる汗治
梅山　薬弁する奴も法る養まえて　丹油
一その寿まかくそゝめる　支考
あ白表「薬弁する奴をむけちあゝ入てゝあゝ
かくそに句もれむあるまかくそに河の至てあき
あよ長白の内の倉おと成てもれすや氏倉て
作ゝ余陸を保むるおゝ氏付い天新の庭そ
西乃の僕の却ゝ伊を梅ゆゝ
三匹　五蓮もさあ苔蓮入る　水甫

我一人云てあれい皆口ゆれ　杜茶
あ白五れあよ梅て却ゝ伊ゆむと各却ゝる
を却い却れもきゆくゝて入て
てかく分ゝけ云おあるの中よきかさゝ寸
三百　天宗よ分てかゝる分お　井炊
内文のゝ乃陸と云て世乃ゝ　呂通
あ白人字ぬ文ゝ廿乃の美入ゆ作ゝ入て世
浮を分ゝ乃陸のお梅あるあゝ
山も宝呉て考る世の秋　巴兮
タリ　苹粉よ宝ゝあゝて丈山拉ゝ必宝きに河ゝ入
あ白三宝山の名よ弁て丈山拉ゝ必宝きに河ゝ入
丈丈拉を苹粉と新印ゝ「苹粉よ宝ゝあゝてゝト
作ゝきを苹字よ宝を倉ゆて。ト作ゝゝ丈苹粉
よ白ゝ人を長ゝぬ却張よ白ゆ宝忘ゝと弁ゝ言
よ長ゝる宝を拉て松苹の海よあゝ世ゝあゝてゝ
と云あゝゝ呉する拉を入ゆしわゝ宝に時ゝ呉又上の

付と必ず吐かる陶物なる上手と名人と
の境界のモ一但余の物あらば是字一百七字
タリ　一には以をそあれ八百目　医者
ヨちくーるる是い物会　酔皮
おりを後悔の句とえて物会と付くり　物会に
句八百目かるれるれる物すを表おを八百目の
富れとる時に「ヨちくーるる是に先ト付あむ
そに丈人い十有の乙とる弟あれ八百目の表
るる先とそ人をるこは物会るヨまりてナノ
目の扱もすきを八百目て例れい扱い扱られと
一日は以八百あ八百とらるもあるすにるる
少るこえ「ヨちくーるに句二ちくるる
用あれいおくられすて一百ろこ
平物　紙の日乃使は以の状出て　壷平
庭人あれい考ぬるこ　源之
おを先方より来る使の使は稿文物る状れむ

拾こえ丈使庭人こえ丈乃先を考ぬ考
さに内を拾れ内方こ考れ考れ拾する拾
の付あれい考ぬるに「おくうらす
考　十拾こ先釈あるこ表今常　風茶
只一百こて伯又も内口　茸二
おを講訳を拾伯又の美こをおを手句こえて
ろく付ろ只一百に九ておの中あれる付紙
変化あるこもすえろ一百法に中おを
句ものるる少句あれいこは新の付後句保
は□係付と号て弁ーろ又空接付の中る
は八俗は口き作あれ紙おを句の考を及て
新句を表るい情の句こ作る丈中は姿あ
庭こいる紙姿の名付るおを句の情を及作る
移こる句い付句の法は吋すきて情の句を
本てるを中但先号の作を能セ人い昔とく
ともキ角木因支考原考の巻の巻こる寸

○氏因ニ先哲の説を評す

ソコ　掃除きれんよりもの葵不　陸吹
氏ガヨシ　雑ニ生て有けるあれを忘れる　支考
氏ガアシ　さもの山葵を入るる付る　很化

[芳]狂　掃除雑ノ二句ヲ挙　是亦ひとり一生の信心と浄葵の
不こそ浮世一世の浮ニ換ふるを一浄葵の
ゝるゝ中の葵不こそ雑を宮きもとゝ不待の
雑まや生涯の人に見ま乃ま雑もまんれとあ
まをとのゝ見て雑さるゝ掃除人の多ゝ
生涯乃雑猶ゝ俗世河ゝ人の掬中ま雑を葵
人て俗俗を雑を雑ゝ雑ゝ門の俗斗ゝ

[東西]雑ワカヒノ二句ヲ挙　さい雑の地を雑ゝて分ゝて
ゝるゝゝ付方ゝさゝ一生の曲あれい俗て
毋ひゝきゝ毋ゝ
▲葵の分ゝ全雑の信ゝ俗て毋ひゝ自
ゝるゝ決てゝゝき分ゝ雑の俗を俗ゝ

葛原葵ハ何ヒを浮ヒ一やあ葵も山葵の浮ゝ
一生の仕換ゝ集ゝきゝもゝゝ
言葉ゝよ幸時を入る　酒を
氏　今まゝ毛和歌を云連を　嵐ヒ
きりの時ゝ近ゝ俗ゝ俗ゝ　雑
[コ東問答]浮ニ日を生果俗て時日氏俗の字ゝ全
雑の雑ゝ是仕換ゝと云て
▲氏俗葵雑の句ゝ浮ゝを感ゝ句俗ゝ仕
他社と葵ゝ古換集ゝまれ一云の仕換ゝ
葵ゝ生ゝゝ句作ゝ俗ゝ浮ゝ雑の
句を生する人て翁生要決のゝ武ゝ句ゝ武
の葵の生花のゝゝ自己ゝ分ゝすゝ不ゝて
も雑の句ゝ雑ゝ文作ゝ述ゝゝ雑の伝云
ゝれゝゝより頑ゝ俗ゝ俗もゝ

[芳]九　五老ニ人の口浮ニ俗の一字に上をもて世ゝす
ゝの遊詩ゝひ雑も一生の雑ゝゝゝゝと云て我

寝ふさらの類を〔おかげ下ニ挙タル丁〕請て嗚と用ゆるの
気おさいまむと只ふる人は俳の他諧は達すと思ふの
預け下すきを知て徒よ文字いまだ分らぬ学羽織
ま所なれば新句にて便りは句作る旅と云ふ
き帰るの迹とも只ふるまでなれ　文始
◆猿子のさるらの付は人皆戒むるを支考断発
明せし故よ許六はいるまやと占向えたる邪なるの
嗚と云へ文机栖箔门の評発しを許六は迷ぬ
故よ悟す宗　さて此付は出を大勢の香指と見て
学羽織ト付次は今略式家内の看板羽織りを
急速出すれば軽き行列と見て夷人を町奉行と
流布より各人なれば町奉行の徒仕ね卜
此よ学羽織の姿を作るを話は一段すぐ上て誰
も便りし卜勢を除られさるを許子は羽織り
為さ美志は奉行よ便るとふ付と只し故よ出
するを彼字して一句を成さ拙と思む志ら

細らは康よめて豪富よ分くし此句意に徒仕ね
とおらば旅立ちる一段活きる故よ意得ぬよ
人かやおるむとゝ話となと仕換と宗を仕換
あらは出て思とや思おて旬か返さん深内の境
皆詢計を呑て居しを話はあらんなくおわきれむ
猿子よく話よかゝりて差ちゝを成さり

□両体両用の話

此案は両用よ似て似さる古体の弁しれおもよ
文用文情を表よ立てる句ある時は後句よ見
えし新句を体よ作て付るくおろの見えく軽き
而して文用ゝ情を文作よ作る付は麻とある
こ姿んほ□諸付の弁よ出見せよ

諸ゆ

丁より気のまゝ来てみる　野明
抱込て松山行き出明り　支考
あふ人毎の笑くさきく　話

丁より気の事来る晴ふるれと見て山懐の体を

を分次ニ文松山を往来迄と云ふ所の
引ふ船出の用を執り一陣を為す者
月を由り多子院の屋敷松　今た
毒尺　黒毛の孔雀尾の家門て　不正
梵い西ま　あ〜む　雷きれ　定連
除るま家と分ふ云ふ只文抑の仲くさると名の
相ふま家門又ふは和紙を乳者ふ指と又て
文抑を新てか〜分ふ家ふ家ふ家ふ又ふる
や〜あれふ家の連あ〜
拾〜あ〜す　百日の征　ソラ
、　故人の左〜除を多て西　川水
用法する　舟乃〜家合　一栄
あの征和他ふて尾作の作と又ふ文辺を文
ふ者尺西ふ有々の友を作の作ふ寺声ま
多て西ふる分ふ次い多て西ふる人を指ま不く
すむ人の有々の人ま指ふて来ふる指と又ふ

家合の家祝作むを分ふ多て西ふる指い作て
も者新者ふ作和作の白ふ連分ふ
皆ふ〜〜〜ふ家く　今　杉用
作　あの男やしとふを左家　酒者
除河の田植中ま作く　ラ
今屋〜を人を止ふ指と又て左家と対次ふあの
男作ま又ふ和指人と又て文ふ〜用を田植のされ
ふと〜ふ〜あの立文云作河除包「」ふる有
ま只文云風作の姿を——結ふ〜ま「ふ女
連の多ふる要作「田植時〜ふ和作末者〜
文抑文用と作〜ふ廊〜ふ〜む
除の子供乃作ふ日毒　曲ふ
三云　ふるふ〜作云和の留ま刻て　作又
西ま〜ひ〜ん家　抑ふ　紙者
若い除の子供の留ふふ〜と自ら作云の留
を作刻ふ作云ふ作ふを次ふ作作人の

あるものと思の留を少列て次第ニ人まで
を時ニ不を帰て仮ニ紙の著を見出て百乃
字捨て記念の留を考へる拙く留を中よ
りて左右ニ書き拾よ又西れと考へ代数
も時あん保よ多く弁へられ家ニ出者す

□拾巳の詩

[illegible]他世ハ文庄ニ文白の姿情を分て赤白乃
云和を分る故ニ一字一点のてまもより云へ白へ
まかそう由ハ多くハ分今の拾色ハ

[illegible]世の人のお我を苦む分方の変化を知さる故
ハ苦の他世ハさるあむ今の他世ハお我方て
苦々寸分方我和もおて白くの変化あ我の
苦へとハ人の分る度を又分むとする故ハ始
を世癖詩あり或我ハ宏脆不休ハの白あ
時宗乳の付ハ我ハ又るとて許さ故かるハ
今あと分て又四の変ハ或ハ拾二百垂る

次ハ歩り件を分る時ハ我をあへくあるへ拾へ
ハハ白を又分て文庄ハ文庄ハ文分て分る
故ハ我ハ又るにきくに申くに郷あむ蕉門の
分方ハ人の分る度を分寸白毎へ系作志の時
を郷由ハ仮今同件の拾向を白垂ふへる
白ハの人中庄の連ハて我寸き程ハ苦も庄
拾巳ハ意の星ハてお拍あ寸碑ハ山南の
東ハを家て五彩を分つる風味号へき時ハ
一横ハあき孫日意数一ハを考て寸とる百
孫の陸拍吳あ時ハ時風明月時へハ我へ
ハを一ハて変あへとハへ人ハ英全の序古
ハりの極乎の幸を又分むる只もへ寸

去去へと梅ハ人の字ハ油変　支考
戻ハよりとハハへの字ハ油変　及条
さちへハハへ又ハて為字我　什庵
今の人ハ字我ハ由変ハ又西と思あむ代油変ハ

時にも噂しまれお邪ゝりてよくさりしをいふも
よふ子亦灰よまろと云て噂つくらむは付句を次
ま噂る人を見をてかく文詞と見立趣意を付くる
其始門口にて出合先ば方くと引止しを伯父の尓く
投足ではありれはあまりと来て来む恐と狗しあつる
先方まて蘇されはよまれも亡き又香れまと向側を
執拠て噂るを竿の内よりえて戻よまろといくさら
もう蘇さやうにて多く参向て通ても致ゝ無てある
そ信すて止る事と客ふ拾之竿の一字にて辞の拾
参る拾時之油輩は灰に通ぬ拾是は序に通る
拾とらそり情も雪池の青返あり

　一ツ家の庇方見ゆる寺宮的　海人
浪　畑の人を呼る　合時　胡桃
　きうくの雨もさりと見天気　路青

一ツ家の明放るは農事時と見て畑人をよふ下付るは
其体を他よりえる拾くさるを次に畑に乃てよふ人の
自句と見之其日の天気を畑人と此す拾を付くり
いるもへさくしても客よ雨を見る気を寄し

　待しよ木爪にてる信る歓　た次
笈　五のやゝうく弘き向風早　巴丈
　三俵つけて馬乃絵書　素川

比信る時廣地と見立て向風早に其場を定
次に其風早を街道と見て市出るを付くり
前は廣みの眺は往来の用とはる木爪の下を
通る拾にしは是も七ア中に多き病に略す

□内外の位

そ世内体外体の作ある詰くるを是とす他社
も毎句に強き是て沈するわと覚えるおく
病人の説きくよ義の時よりは去烟も微弱に
宛けるりあくいふ志ありる去病まで変化とするは
悪人の事之善人ありて内体ありこれ外体ありて
りらまての句補をとくいへくすへき変化

必白面ゝあゝて分孤なあるそう

彼戸は行ぎ分る麦の末　残人

店をさひゝき麦の引割　翁

あゝ　内仆七ツ半

家みゝて接ぎ白むす後　人

おゝあり　神ゝ乃おゝ　翁

人去て年さ内仆の白り　人

神せる古る者の行隅　翁

時ゝ角のあゝ　ゝ　ゝ中ゝ　人

ちん。ゝゝゝゝ麦ゝ翁菜ゝ　翁

吹ゝ上ゝゝ　麦の　雪花　宜雪

陽る色陽の色ゝ古ゝて　、

七ゝゝ山を出ゝゝる月　翁

麦　外仆十ツ半

町作栗の食ゝる砂畑　、雪

麦ゝゝゝくゝたまゝ麦の血　雪

陽ゝゝゝ色ゝゝいゝ寸長ゝて　翁

土の屋ゝゝ神ゝ月ゝ　、

生ゝ麦ゝ燃ゝゝ梱面とゝり　雪

日暮て残る　松ゝ切を　翁

□自他の法

壬辰自白三白続寸ゝ法出る出花ゝ月

是ゝのゝ時変化不自立の人の云ゝひゝ云

ゝゝ九自他ゝ通ふ白ゝ麦ゝゝ付ゝる自白と

極ゝる白ゝ他白ゝ決て分ゝ又他白と極ゝる白ゝ

今百他白と極ゝる白ゝ決て分ゝ自他のおゝき

白ゝ自白ゝゝゝゝ又自白ゝゝ続く

おゝ是云のゝを彼ゝ者ゝて他付ゝゝ作ゝ

ゝゝゝゝを変化ゝて自他違ゝ白ゝ分ゝ付ゝ

分白ゝ続ゝゝゝゝゝ丙ゝゝ白ゝゝゝ又他白

ゝ他白ゝ来ゝ時ゝ二白のゝゝゝ知ゝ時ゝ

分合ゝ並おゝゝゝ是ゝ古ゝ中ゝ多く作ゝゝ

自他向合　ゝ人さんゝ去ゝて厩ゝ郭の分

変凡分　佐ゝ移て古美あつゝれ

三八七辰目おゝ年ゝつの向合のゝゝゝを付ゝゝゝゝゝ

かく付る時ハ新の句ハ甘く依て斧そと見へず
附ときも一向ずて新句とみる之自他向合て作る
様ハ古くさくなきなる之付句と知て前句の詞乃
次の句を作るなと但姿の作ニ向合さるやうに
唯前句もあれとそれ皆作意の地より作る
なそて向合句とハ大ニ異なりけり

百姓の息子も稼の名をきって　發因
　見ると和尚も喰せて母く　由之

難
と見ハ息子と和尚と向合たれと詞の仕口ハ向合ず
前後ともに他よりみる人の句を作る是を傍
他の句に定めて其形をまねへし

□案方禁好の弁

前句を直見せね・程ある・皆あり・義・吐・奇・
出ね・すト・是ちらす決てあるまじく　その何そるも
かく見えぬ句ハなさき故之仇語ハ一字一点ニ復
て微細ニ余句をも差分て変化さする其の

あれハさるわめなる拙方あらむ理ありし又「案ずる
也直ハ是ニ只見る意の付「草木多く欺き人作ニ
起ずハ迷く付「岩石ニ旅人と見立て也く付る方
「只其椅其椅の延ハ「只其人其句の人を定む
ハ付「無芸人情ニ只光陰時刻なの付「山門の
椅ニ多く欺の是を並て会釈付ハん乃遠
等うの次ニ飲食前後の付「詞作の向合付など之
此案くハ其猶此の下手の工夫より出し付方なる
を是非折彼しかひて中ハ絶ゆるも又既已来世迄へて
拙く多りて再発しるる类之此外「三句一意「字奪
「三句変」故字付なの仏乃遠「おくの故後句の故
換家翁が「一趣「言葉なの故案の仏乃遠中此
より発て世人ニ其是非をさるものもなきるや
七ア降ん仏ほニ其惑を翔くり依たニ挙る数條ハ
禁好の案を手柄ニ志ゆる初志の付く一変格ハ
子を能せさる也の志似するもすきなあるす

△おゐを重ねて又立て付る仮

陳子の不二に尚英は秋の雪　戎人

花とさゝるゝ苔乃一瓶　キ角

陳子の尚英は不二の雪おとして床の活花と

付られし陳子に尚英は尚おき付い重ハ又ゝれ寸

但ゝる付ゝおゐ英多ゝてる再せ然ゝるゝむ

只一対一尋ゝんはよさる訳もゝてゝおゐの変化は

困ゝはゝも系あるおを重ま又ちしい抜き流ゝ

△おゐを又せおと又ちて付る仮

、　新さんの大さ立ゝたりゝ　人

風よ吹れて海る市人　義

大さ立ゝは紙抜の作おとて市人のあきれゝ拾

を付られ新ゝ一斗入より大ゝるゝ　さるを立

石はゝ又せおと又ちさゝ　芭一尋一尋の曲ゝ

△おゐを寄ゝと又ちて付る仮

本出　蓮の柵木まゝを跳て

おゐの花の紙なとあゝ　義

おゐ菜宝菜の沼ま似る流ゝ付られ　芭

業の柵ゝおゝさゝ又ちあゝ　さゝ花月

の艶ある白を寄ゝ寄と又むゝ立おゝ

拾　松島の月　人

ひとゝて寄の五ゝを言ゝ　雄而

おゐ松島の月ゝゝ返ゝ寄を抜ゝ拾ゝ

又立松島の月は七ゝ　ゝ付ゝ

東六　秋水をちと和けて秋の水　吾仲

秋又の寄ゝ流ゝ　宇中

シウス井と秋の水と和けゝ立て汚の拾ゝ寄は

ゝ又て人のゝてもやさめ拾ゝ付ゝ三句

三おゝ今一仟の拾ゝあゝ仮の一尋ゝ

△おゐ寄と又立て付る仮

歌の門ま二歩寄ゝ　ソラ

寄ゝ流る美い世中の地蔵ゝ　呂丸

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

△茅白の名数を人まちまちにて付る例

程ら束〳〵　数〳〵せむ　小枝

芝川　友達の実名の中に郭ち文　万子

鼓を能役者と云て程をイ名とされ物さうれて

かゝる又ちい□係付に係るおく於業方に不易

除りあり付号に除り中の除りあり一百止切たく

△軍中に吹食の付付る例

辞一人を芸武者の中　仙角

東花　所をのむに汁等稽の者ゐある　千声

兼井行ふ所也後同い大食する中に静の小食ある

をもて弱く拙く是亦一時一会のさうこそれて

かゝる神祇の教化を又沒て猥に古人の会を

犯さむ中丈作者のんきてあく笑〳〵〳〵

○諸変格

はきに峯〳〵る変格に弟〳〵の者の法句の上まで〳〵

加く式△歌下に世に変格と者て格

外中の格外の格に於て必ず伝ます変例

さく宴に峯すともよるべれと後世又古例を

拾る人あて丈号を印ち又房と云拾法て

混雑せ中〳〵初んの歌あゝひと高てかく

おゝ〳〵号去正格と変格と又氏変格乃

変格あるおゝ三段のおを初て百世の人を欺

さる会をあく又丈に変格を寄ともの例の

恐あゝむ是まの大字時ある一

□一花ニ花二ホ付キ　七ヲ
　　栗の陰といふも是ニ当る　支考
反衣　力仙　和　肩衣ニむも咲ヲ世を捨て
　　玄関仏く大法おもむる　ヲ
　　後　肩衣ニ再むの古ハ丁ハ　考
コハ蕉翁の三吟之後初の句ニ白炭を代
といふを同人二ホの作意あむるヲ主人後て至
る所ニ於ニ百ニて一意あるんて〳〵おのむ
を表裏て同人ニて二ホすきき沈をちてり宵
其意する人豆候ハく一度一曲の手柄ハめと
門人ニ至れて後蕉翁ニも悪眼を与ふ
翁ニ百日意をもて是ニ時ハ力仙の花を一ホニ蕉
三十六変化を三十五変化ニすと不難きこと
あ寸佐ハ三吟の者ニて花を宗匠する時
ハ人も同人二ホニ成る所ニ必花おこて白炭を
代るヲ席のれく差代する時ハ引上て後る

ヲ称る古者ニて必遠さる古ハ之白炭を代
る俗ハ蕉翁ニ栗ハ吟者ハ「栗むハ
百姓ハ」者栗ハ「小夫ハ」ハ同集ニハ
あつ山ニハ未記ニ記ニ「百記ニハ」夫ハ野一
　　△花をおり折くさかさぬヲ
芙山　ヲ　ようや世の名も残る吉野山　甚二
　　挙　花のあけぼのさてハ夕ぐれ　弓波
古ハ月ハ折ハもすれも花ハ空ニ上さるを
最美寸へき者中の眼ハ有ニ上各ハ者ハを
ハて花を植むとんを或ハ花を賤ハをりて礼とするも
大ヲのおのれく佐代者ハ俗の花ハ有ハ空ニ上する
時ハ同人二ホとあ一ホの蕉翁ハ汲ハ稽和と文ハ
寿を求て吉野山ハ花の伝を含てかく付るを
出ハて出かさ寺といふ所ハれも夫分おを花ハ
ハ出て何有むを引上さるハ有ハ花の空ニ上同人ハ
有るヲ我ニ成る始ハ初ハれハ夫ニ上る

分おするも亜おるよ似ようは仏今代寺てかる
寿を立むとも今亜之の毋院にあるまー毋院るる
おい時寿るあれいくさるを式ようはるを引て
花をさ寺伝とくくうり金仏燈を伝るを入て
泥仲水を伝るこそ行後いくられ

十七 ソ吹て梅ようを朔の衣 大主
ハシ 花月のおそ春おくくを奉を 伝し
はるくうるさくて浮もおくす

△表の花方之巳下ようもぬる
ヒ栗 カ花あの新の盛を惜むうふ 白ま
おし 月や弱るむあき親ようは松さて 文り
十七 キメ むのを引出まあり 夜文 伝
花を表する時に方之を出に白メより八白
ノを之下を下を出あるる古今通式く但ヒ栗
を羽伝之の葉あれるる伝の又伝ヒや 根ま式
表八メようもあれるる是い六花二梅の出あれ

伝ようあくす艾和之を羽出席書を勿伝法門人
ヒも伝あるれい角門の契と又捨て去伝ようあくす出

△正花ようは用まきあのくる
伝中花・灯花・月星の花・花雑・花ばくき・伝の花
茶の出花・花やう・花こしく 時れ決て赤正花
ヒ栗 うきを壁乃 伝中むの時 出吁
花指 あの伝の灯の花ヒくくと 琴風
ヒ夫 灯の花乃 抓ヒ口 被 書花
伝中花 灯の花正花は用る伝外ようの
キ角い是を伝むを大の伝とんは遠むを伝
花むを大い花の海をあ寺あるを古今通て正むを
用くり伝中むを灯のむいさるおようあた

松風のヒる 地表 又中る 御立
艾帝 陶きくうんの庭潮で宝の月 ヒ志
月星の花のいろと三吉世 嵐ヒ
是ヒも古式ようは用れと慈門ようは通ヒもセぬるくコハ

残の桜なとは一非桜の正花となといふめと
さるなれは花のつきなきるなく
アタコ ハ 咲れてかくれなき花なるを　実匠
土芝 ハ 浪人のおちるむきてあらぬを　素丸
蕣 雅 むかしかきの比も明暦　仲格
式目も角門の契之決て正花にあらす
句　寂の大も及ひ見ゆる春の出なむ　り由
コハ　目の下に梢の波の花咲て　許六
玄[李玄]春の出花陰おのむやらなるも正花はヲ
ねて[ウ花][花ニシヘ]まもかく述て五老門には正花に用
ゐり丈出お侍はキ角 許六去来支考なれとも
三子是を正花とせさるは祖翁も未定にて
正花に用られさる成くされは[花ニ]分あの条に
翁も未用事様の由を述てり桜は花の体そ
花に代るなれとも其を花桜と作てる正花
とせさるをやさるに自ら僅に其の貴賤のむを

怪なに代むとつふは不貴賤とつふのことなくす
寄とる母む其志といへとも其のもむも深さ
のむやなるもむ雑むかくきも花の姿の景お
なれは姿め先情後の法をたてる翁の殺ゆてい是
是の事まて名道の書も多く子く勘破しよひなれ
とも古式に正花に用来し故に慈みに破せむもと
外とを言て皆従容の旧記つれと自一句も
作むをぬとして其事意は明くさるに翁二人の
此の判ふなうしたのむも阐のま去はチ引て彼のむ
正花の説之は人もあるよし其句は此方の之ての
むさも学に合ていちしるき作法をかしらさる
此なるを是とても正花の体とせむ人は彼枕席の
おけ句に意を寄る挨拶は付句を付て寄る
まかせて意を出しもやせむとうしろめたく覚るく
例　見せるの花粉の茜むやるに　洒堂
此一体は元禄七浪花にて翁出席の歌之十哲式

法を学ばさる侍の才用まれの役にて正しきあぬ
あく支考氏附法を杖にて蕉の心を学ぶ知られ
ぬ者も後世に法を他社を拓て我こそ人も
あるむらと東之は むやうむ〜の用い古物も胡
乱のさまあれい正花の法に及さむとお彼一
さる本之は保おのむやうも正花に用あるも古式の
法容にて蕉の心を学ぬ者をもちゐめむ
老婆ぬ切くさるは天祥十云浪花の天満法会を
巡て百力仙を拵う赤合六十に老女中は
九月 独刃のめつさがきみるむ 天満
十 出る人い皆むやうは拵て
土 人の乱をすきよてる茶のむま 一袋
六月六日之茶の花魚 赤正花は用う
十一 むやうは育よてる衣装付 に天
二月 五 ちんのりと是ておうて茶のむま 女が
九 むの年の蕉に何い入てある 御に

九月 五つ之月い弥て茶乃むま香 一砂
十九 英〜ん子を並て むやうは 拵友
十 むの年も後いお表の大を燃す 無
閏 愛宇や宇を〜むやうは
十二 むの年もこや〜たるぬ姿て 一矢
去 蕉いむ物の乱も付すて 蕉む
十二 ハ苗代はひんのむも〜 井水
七 アは問は日和日今のむやうさ 任風
ヤ花不寿ある汲を成うむ花年い蕉も法子
も用れと雅とんもそそむ年をれの表を雅に用る
附い正花はあるさるれ之代ら美天の花に子をキを
続て正花とするおれいく えうせ乃のむはあす
ア蕉便ひて十を弥さるはる人ねて主者子
と呼ぶ主恍の人を或りるい苦〜きるとく
敗は蕉の法を追て門を拵る者れ北京はるう
新て皆蒼門二世とのるとは純正あるえの

只一筋の道帯くに門との字家侍は文之文及を和て
各祖父を伯父姉て二世の公の金文を拙む

△非枝お正花い弟門よあきる

屋月日 古今抄ナンレテ 枝およあくさる花るあくて一度叶
きるるあり文故いくんとあれい花の白白あを
よ事去連て文次文を之の枝おを者おを流
来る時文おのむ雅むよあくいるるするるや
枝おの同事る元合そむあて止むへきや 鶏

枝 あよ件の世の上風い渡うま 在原
嫁人とあくよ引紙てあく 光俊

殖む 〈千戸め寺むの表を枝の紅 東風
ハ 付てあくむく 世光一筋 致由

枝 日の居り初るも表めぬ小松原 俊
コハ上又は伊イ又 文俊 の月星の花の伊あとて返
うとる色非枝お正花はハ高弐るあれとも花とて
非枝とくるい平生他社の伊は表くい筋い居て

用ゆを寺枝くに「花所む翠むの枝花ムよの美
美のむよいるある根陸よみて枝おるそと難す
らあくそい文弁は正花を花のそき拙むう
似るる表はムあれいむの居い所拙うされいそ必
表を殖けて難は返すとる潤明あれある梅の保
表も返すくて東武門人の正を位は旅るそいく
ち〜拙むいおは一すて宮殿あ〜と表あるふき
あるとそてあきむを付きもむおの陸ムあるよさる
ムをいあくて祖表は考き宮殿きく又表を付て又
枝おを陸け無と花の枝れぬ拙は立て非枝の粧
花を付て手拙表は清むと先文付白を少ぬ定
より文作表の拙の邪ちくて人の花の表もあく
敬字る考れていとあきまくを程く尾い
ヤ敵ムおとも今の風子文哂あ〜免て
△花を屋さきまきる
れ ちるとる居の 曙 白りり キ角

江戸　春をとゝ今は吉野の旬あり　一侯
月といへぬ月にあれとも花といはぬ
ハ古今通式なるは考ふる丈角研よい本云
才は接手の月として何も花正花はあるそ
芝雑事の五あゝむ

△花を愛むきさる

横山　花よとゝい花の咲きまされも　仮村
花て白匂多て白匂り也

かも　散る彩神の恵は家のも　路矢
花のんも人乃んも　孝

雪白　蘆舟うえてもふゝぬ花を　麦士
むはをとそ　昔を忘く　孝

支考一代の中やゝあゝ義及徒るゝ氏抜ふし
但横山伏い五尼井の会あれい浮云も不存い
原寺きをいるる丈行の元俊ゝ和歌て
愛付ゝ何もれとも只月花のゝ愛さる

て月むゝ和の空あるなゝかくする付い白匂も
五ずとゝむゝ花又ゝのむと二白月ゝといもく
白匂九十九変化の難あむ支考ゝ和て正も
を能ゝ仏ゝれと仮ゝ三の五あゝさるゝ二世ゝ和
記ゝあさるゝ丈ゝを考ゝる三世度の人も
又ゝ弟の路をまて所ゝ考り

□月を寿ますきさる
和ゝゝみ考もかゝ　おゝみをき川
和帳子乃宝ゝ　ゝゝ夕ゝえ
雑　ゝ反ゝむも和ゝ　ゝるゝゝ
ゝゝ一ゝと行宝ゝさゝ月

寿五　ゝゝ三ゝの川社の左ゝゝ宝ゝる祇川の左白
表ゝ式二表ゝ何も反の左白ゝて五白ゝ門ゝく
月行ゝる左ゝは分ゝ御ゝと表ゝ花ゝ世
て月ゝむゝの和ゝと表ゝ寺去ゝゝ表ゝ
月ゝきゝ吉法ゝ方行ゝる五白ゝ六白と秋キ

あらむ者之のむ那なる年て表の配極あしと
宴ま百年の伝を伝てさら月の名を出やりそ
て古武ま歯の新と結て美名ま用る伝へ拙ら
ぬさら月い新を結ま い杖を付るま及さるより
月の一字を原すの天象のさを者るへきと 約 又
▲百年の古法ても古武の伝へるさ月ま
月ま多ねい法ま少なる月あきまと又者と
の雅の那年ま五句ノの月の年ハ百年字と寺
雅の残ま月季と許ま 花ノの拙あすや宴ま
月むを左ハま命あ那あらあ伝ぬさしの
イ名を出てまらむさら月ま月字白面ま
又えて中へ和歌のかひあるまへ〜美西
明るをまり新の英や星の影 乙出
天同 乗ノま字をさく月の片ら 表版
歯の老ま名伝 又えすきて 杜麦
歯の新を月ま用い古武て花ノま伝へ コハ

残の天象を結ての拙あめとさら月ノま付
へらむ月〜歯の美ト作て月の美ま多へらの字の
新ま那てあらむ又月の美ま多へさい月も
季も拙あむ花ノま用る訳家て弓〜

△三百月ま明二ある〜きる

三匹 ア 杉のまろれ〜さる三て月 キラム
ナ 八ノさ不友ん体ま三ての月 涼ト

支四 古武ま百句二とノと三百月八三字舎衣の名
月あれい決て二い字ら

▲匹和ま伝へ〜古今和ま制する三匹性ま付るも
四文考あれと戸い古今和の万を正とする〜

六行 ハ 万明も考ちまく京ノて 丈 明
ア 万明ま一楷面る様ものもれ 友之
是も世拙拙一の和 他ま伝へ〜

△月を雅ま用ま〜きる

夏月三 月い紀季まありて表ノも季秋の制あれい

雜言

△秋の割いあくるも独雅の月いあき侘しさ
は秋の月キ角を折しう
拾　野子供彩る比乃月の気　キ角
長　明るい天一神の降る　月　我笑
六行　乃つきり月の名おいおちて　ヤハ
空東武一帆の葵と三白皆秋まして面白き
おを面は法を彼くり義及待るまさる
但月言花あるして雅と沉こ比何ある
△月まちの正の月あるも
月まちの偶そるき蒸立の恬　文革
拾　今ニ　くやる彩るおき月の色　去来
義の沉は月まち多れも皆正の月と掛する
また拾光の字法あるむと見るく
△月五去ちるつきる
及　乃去　あるく　関川の月　支考

月言

月言は花陰の金表象で、
義　秋月　行る　行る　乙彩
五去定のおは正去の変換いはもあるも
あれも義の沉は何おき上は月あれて
雅は嵩はさんきるく
△月言いは月はあさるも
キソ　月言の扁て弧拙吹沈て　ヤハ
百九　月言の宣去ちの乃と　素秋
二ニ　西河初去は月も秋おき色あり
三八　月言い　秋の色の名持て　紅葉
四ニ　月の乃を写る　周て申む　天竺
四九　月のいちとそうは秋の振　晩柳
四十　月言も果てきりと振の枝　楚戎
四十一　月言をれ連る小桃灯　白川
笠時義の月言を乃偽て待まきるを

一集は一二あり。格のまゝも月をまきを月も
花を書を毋て数多用るゝい人を作しうもむ
と云ふきこゝをきんまりあり名つけこと

△早月抄去月仕抄

ウハメ
旅至〻〻丁麻まする　朱警
小弓　朱名の旅えむ三ー行そきの乃　佑阿
田い枕巴名二ー行　キ角
キ角い早月抄月まあるる　無名れと武経
月あきれる仕抄と見也彼二月名い キ角後後
ま支考の抄くれい頁倚うんあ
一格表五月本のう考ふうあ　湖夷
ウラ　おまふゝ〻ー八郎乃考　唐風
ウラ　晩のあ云は云乃杖うれぬ　夷
月ナレ　よその御は佛唱ふる　風
あの庵や槿を志を拙保ー　夷
叫る考ー去月の考　風

名抄さりの後月は表名　去
ゥ月花の北九〻まつまりる　風
武考初ウ月あ〻て又秋五あり三月名は初ウ
を者〻倚あれ月名仙ま去月ウ月は
用名武蓋考月の月　去月の新あの出抄ウ
全体叫る考ー小杖の月ト名きうこ

□季吾変格

蓋　フ白根の沖は白矣おまを　相紫
桑名て　一寸　菊
彩や白矣白きう
作る矢吉ま矢あの吟白矣い去あれる桑名は
てい矣より出れい実考ある有は武作あり最弟
重と成〻き有は姫い考庵ー考れを再
抽は暎と歩きれうコ八一時一廣名れ倚う
〻ー敵は外の中て一句抜すうる玄経
考出喜庵るおて雅はもれぬおあれいあり
武余古集は生乃夏おを杖は出杖おを考は

入るあれども〳〵そ〳〵式の定まりて変格あり
ひさ フ 稱待き秋ふかき芹あて 侘士
の フ 夕への月うす葉仮寄出す 如雄
葉仮名去の用あれども古来雅之事ろれ
ても用る仮名〳〵式月夜は事あるあれ歌よ
連て名とあれと再するゆよあ〳〵す

△ス東百匂三ホの変格

二 ちをえて笑ふも今を三ヲよ フ 舩
お芙ふも白〳〵初 梅 白藤
傍〳〵ホの〳〵 秋きの町 氷花
二 ウ 雅表〳〵てるる上下の笑 フ
脛は 佐連も 小度京 白
う〳〵も乃柳 絮の孜ホ 氷
九 梅の傍をすて〳〵房 合 方九
線香の結初さよ去の尾 嵐雪
三 雅ホ〳〵方は撓やる方ヲ 拳白
人日はそ〳〵る方ホ作て 開水

松とる法の月い伝れす 吉井
百匂ニい傍あれども三いホはの
△力仙ス去ス扶西方あるキ三ヲ
一撞
雅匂 お〳〵傍も月は雪ヲ欲 仙尾
ま三をて宮の撞を技をる 信風
ス 萩ふひ京ひ池れあやき 尾
八 扶 せるきちサは賢を生さもて 風
ホを加る 節の 嗽 尾
九 ホ〳〵の糸撞七ヲる咳さり 風
ス去 三 ホを滝の虎は〳〵 尾
御の双は撞いそろき兼て
雅の不匂は月むを約る附ス去ラス扶ラ一
方出ずいす〳〵又向ホ〳〵ものすを
ホ方とも用て雅の月むのは作表設れ
人地てと扶〳〵式ホは荘ろと雅の月むを
さる附ラス去ス扶を一ちはせさる お好ろて
初て傍きあくさて宮は宮の撞に桂木のヲ

て月の桂ゑあるきと月むとする但色
は桂樹を対する所を白はなれ一枝と仮
今月花とられとて月むとゑ弥きおきス去
ス秋の中は生手とゑ花多れたるき枝の所ゑ雑そ
も但は月むとくさるを但色七ス共月
花い初て但ゑ月むとゑ花ゑあるゑ
△秋字きき矣何

拂十

麦秋の高はゆくるもきよ　七月
彼岸をあるかり　秋風　仲志
季をそりてる也去のおく

△秋キ去キ六號矣何

白秋強て蓼はまられい老人　木尔
文文月乃　九七　開十
世てもくてゑもゆやさぬむ　文十
溪の高乃高きき矣　老尾
何とて拂い来る何は仙て　冬二
赤桔梗孔ひるる何先　奈井

ゑよの中の左和ゑも去果く　東野
意の字者を形る出代　冬央
てゑのゑれ契いかぬ文　如信
今拂とさくくを正月　野
文力むゑ邑のゑりゑ　信
ゑぬ意して仮ゑの中　央

宮住のむを去出所られとむの度は季おき
もあく拳百雑はする　文命と名て號芒
むの度は季おくてる雑百　弥ても仮すむ附
も號ゑるゑさくられて季の拂い者きおく

△一老二のおを三三用る変格
変は拳ゑ[寅令]は一住一と拂さるおく成中尼支考
汲老はあり自梦て自彼れも　みくは仮
みられい拂ゑの方とゑ　ゑ

上白　白高は供て居き萩の月　里風
萩　萩の拂ゑ也ゑ萩の小果拾　奥仙
萩の拂ゑ居ゑて英八文　許舟

一白　白つくや百つゝ房て房毛　義
毛　花毛巻附ノ了し　おそ附
撫山藤　為て安井の徒ゆるむ　除川
夜　さらの為を夜は脚る　伊阪
季巻そうても巣拈のおおれ問るゝ
・翠島　又ゝ拈の木巻ちつくたたち　支考
房巻　房巻よりのするゝ広阪　徒古
ちゝくと房むる面の房ゝて　逸正
古式は房巻季をゝて巳ゝ巳ゝ八月問季ゝ
院示　白の為をしるゝ抑ゝ子　蚕山
抑　院乃示の　青抑の尾　孝
巻白の白ゝれも問キゝ
ヤワ島　巻の明て入る日い暖う　宇中
号　小松の中は巻る号をきゝ　友阪
トテ　孔うりや伝を書巻房子　金毛
上り　雲花を花ちゝく悩ちろう　恩翠
拈為　夕干の泊を初て中く悩　義
独

悩　悩まゝくとてちゝ元祢す芝
キ午　悩を云て　猫も恋する　播東
孫をお人は夜のてふゝ　扑人
□表は悩むおを用る変格
次白　三　孫背の力たワゝまるゝ　柳水
尺　毒栗　六　頑婦を巣の　悩うゝる　キ角
白仙　三　毒はある人を夜と云出て　天金
毒氣　巳七毒ゝ山を　出ゝる月　義
白粥　、江戸尺てゝれい　生人男も　二至
サ位　五毒切のゝもあゝ子き不二角　史邦
皮　、毒あゝ九條あゝの巣の声　支考
加川　残夜ゝ花夜も向の孫あれい　曲宗
古路　六天下一件田　稲ゝまる　義
反　、紙麻ゝる　上京の　杖　考
出夕　、添り毒きゝ徒の　狼　白牡
印　七日を強る頃毒の巻の逸る　小枝
天八巻　生来け出の名西と号て百白初表は名西

する他乃の祝式人く建号建宿の式ゝ初面を
すると云て名あを作り夫よりて南原みくも
苦くすと云乃ゝ浩く建号ゝ秋吉の二式
あり他社ゝ方あの秋式ゝ宮てるおあれ本式
とも秋式ともいつきおあり建号ゝ例あるもせよ
矢倉立圓宮因あの七ゝ九ぬるを巧出ゝそ他
社の本式くとて多ゝ彼法の業高きあく文殊
▲已蓋門はあり古式をもて蓋門の人を誠ゝ
已にて祝式彼法の眾人あれ都て矢倉宮因
あの七きるるを巧て天理の他社を立ゝてそ
家ゝの式地あれさて宮は拳る奏あ菜古
捨遺印の早の三箱の級ゝ他社本式ナ白表
る名ゝ一出すゝ勿位あれゝ宮の例ゝ力仏
みるゝは奇く変格は出ゝうさと義の
例もあれゝ法て制する変格ゝあり
△稲は神秋を出ゝる仕様

かも　坊　かも山や林下の柔指附名　蓋門
神　田の寄はきき　跡宮
次　みきをを云のて稲の穂を
神　木の例のそそる羽度　笑
コハ本白のかも山きき穂をを神祇と忘て稲は
神祇を出りしかも山ゝを他吉の新い地名みき
もきもマと門祢云キも例の吉乙穂をも神
あは例ゝ〇ハ神祇はあり田羽度い神祇ゝ
文日　ムあゝやあゝや乙をを人をを徴月　百例
尺　仏の喫も七ゝ穂　花宮
みの　ムあの乙や乙をゝてきく世乙ゝ　蓋例
尺　他社花弄名南風文の宮　昨例
云乃の白は云乃の稲尺の白は人の稲ゝ
式宮ゝ白を秋と忘て知ゝ
□稲面去変格
ア　稲盗人の　尾を　翁やる　翁
ヒキク　ナ　田を　ピ　捜る向を白の稲の出来

古式い云々て三あれいわ去佐のおゐむけ〜
苗の出来ヒヨ稍の出来ト写法セ〜まあすや

△木瓜茎瓜茂三流

山瓜 小栄の唐よさろと次 仙去

一次ナ ホコレ

ちゝも〜 熟きまあ越 、

弱ぬき席ゐ夫ゝ橘さ〜 弱

うの

へ方ち仲恒植よ木瓜もあき蒙 麋附

笠面白やあの実打る 一晶

ホ三 ちる会皆よ橘を打ゝむ 弱

他

月も久秋の高さき花 配刀

妹ゝや清よ植蓼の生茂 笠風

第三 又出ち〜ゝ唐のもをた 風麦

白角 根松苗打恒の〜声 虫子

根コシ 他の搭後〜始ぬ恒也ひて キ角

陵つる帆乃天面ち赤根茂 崩雪

□人佐茂

よりつきの面あき女房の赤色き 貸水

杜白 狩すゝめ〜す山伏の髪 箱

若白子よ指て女雑奇り 子

蓼茎ゝ下結の若歯よ西れ 学和

焼 根瓜茎ゝ下結の若歯よ西れ 学和

根瓜よ指ます〜 夫平

ゐれい秋化〜とふく和乗笛 角

あ〜〜ふるびの山を岳熟 和

孔明の刀をく麻乃角 寺

狩も泊又ちやと人笑の梅 膳老

戸 隠世〜〜きよ人あゝ几中 独

ゐ乃文を出ていちゝよ 舞

△ゐ乃 茂

二む指ゐも朱鞘い乳老か 茎二

ゐ壬も一ちゝ〜ゐるの天乳と れゐて表付 り弓

梅十 花ゐ年〜ゐるの天乳と夫合て 伯楓

若代よ何れ俵も乳老 地飯

山ゐ夕 ゐ年ゐよ何や〜ゐ乳 配合 白粕

根よ指くいゐ乳もあゐ 朱粕

△人去歳　格枝

移夷も侍ての鎧をあぬ人

金彩

尾宮のきれいに二度去一度　葉角

峯折ある西瓜人面　尺樹

ちの名と花飾の者ろうろ見　りお

葉繍をりて葉やんする　茅む

去年てお寄る月えいさん会　為丁

笠

□天象歳

月

市花

月の明る陰の名やけ　サ笠

氏代の葉よ熊もつれぬやら　史度

見て日ろ〳〵元寿小田原　キ柳

日い新く去代の新様作れて　晋舟

とこの使ら表も見す　梨月

久月の草よ後作も居あれ　和

梅

日早

只き〳〵と星二ツ　夜度

白雲の松も医年て博の花　ろ何

約多ゆて日いろめく　仲右

△日蓋・秋分歳

きく〳〵元ろ日度や　太範

山夕

日ろ日蓋

尼蓋い矢脊の麦吸嗜ろ　ろ波

蓋ある子の横ま日のろ　理飯

只も今引持代乃三の月　若芝

自仏

松量蓋

〳〵蓋ふのみて仕合　宋乃

西東花よ〳〵と　五七　里仏

何を忍の灯篭吏西〳〵　支考

秋百

秋分

秋の内の拍子もぬけて寄〳〵　及朱

舟ま伏人の一枝　枕風　度度

△後お歳

松島

吉表

吹き方の袖をふる上見身　義

松升の実加を笑むきの市　徒

暦きてる　陸の表

秋百

秋百

寄国

寄国て机の先の萩秀　朱

秋きる成て人も寄き　水南

ろ〳〵きう村面まれて寄の月　考

△後年和歌

白雲古義仏くをさまりて　仏風
白き雲よ雲なる和中く　うめ
雲なる雲　あん鶴の方のくと　如代
日きる日い旅も天長の春や　コ秋
さ　雲中　そんるを　ちく寸つき陸　キレ
されいて西い法粒むの雲　花字
空の雲く　却て又わる　、
あちくむく日て登のむも候　吾田
攻目　、　秀山竹よ　生との雲　桂形

□神祇歌

庭橋荷根よ頂て広ゐる　ト尺
他作る　玉ゐ役者義実加あれ　子奥
玉きちき度よ日翠を使され　翁
初樹のれのあちちちう　鶴田
江戸玉の仮宮に自よて　不柳
みゐゐ宮の一度とよき　貴小

歌

△和歌

よきゐれい仏却き　ま狩
ゐ打い月を　揚風
ゐの整ゐる　之宮
後生我の頂居　長吳
山多　氏義陳徳金の代は持さや　六之
地改くくゐ　玉波
△石不歌　白粒
玉よ因石時よ後ナきお後　義
一玉く　次も発くあ大痕のあと　杉風
底乳技産ますあれの者を孫　翁
あ和の牧の四石旅　キ角
歌　和の一声夕日を月は　改て　文り
れの脂色　秋きき　り下
意発年よ技今陸る家の風　角
徒吉　名家婦き帯家をとる　彼宮
さ月ま八七義のあのるうむ　、

△堂。山。天残

高花 堂

柏よふ声やみ堂ろうろむ　翁
柏斯よ服為申く　秋の風　柏葉
宮し吉和の哀しろ月　翁

古拾 山

西を手さう探索の山　二葉
畏とりの岑より月の麻かり　紀之
秋を庄寮の床の山風　卜尺

天

天下一作田稲急よある　翁
浅る翁の後の新よ入えうや　以呆
やよ時雨　天帝のさうさ　吉虎

△同作箋残

次句 ヲラ子キ

唐土提灯を枕て眠る　方九
すりこゝる女房の声更て　翁
血掛の森老秋や思ふむ　キ角

シ、 本リ カサ

堂臭ハ木履をさんて秋つれて　丈志
意殊の閑よ迷ふにはし　素独
にせんきん今の名よ知さり　山川

△衣数。犬作残

集 衣

菽入の天の羽衣　標よ忘て　周東
のさす拍子よする連芭　張杏
手に采被うゝる気の月　角

名ニ戸一 之縣

被ふるくハ数隊と恩ひ　孤柳
借忘て下女の乞うて五用丁　其雪
構たうれより跏んる　手忠

夕白 犬

○
頃乃なよ乃の時の夕烟　円入
宿屋の後の乃舎よ　哀之
灯火のむしも宿ハ秋にして　峯陀

お許 植おお残巳下堂之の中正格二去乃
部のおハ法て制する変格ともあすハ巳下よ
挙る字残の中も正格そて二三去のおあり

□活字残変格

台ク する

有てさ角力ゟ揺さ振する　杭川
金胞と名のまさうよ告られり　、
名居の極意を勝初する　御之

あ成

木秋は紅葉の松　出ハ
紅葉は成て冬の人しの　長　胡及
代はあれ世の俗れ　一井
ゆかやくるふ死ぬし　世振
振は行くいられまあるの　白紅
お元禄すきものをうき　東羽
ゆ虎をふあくらるむの山　口函

夢、

奥元

ちくと又去のはまれて　不丑
頃は出る宿の　出廿　浮云
月蝕の元て更あるの新　北

コハ出

香の烟のをくく出格子
お侍の一万家まれ入る　至聚
あ房きくいはきもし　出芳
言の白入れる乃吳市　九官
さくむをうてを入る作の梅　止水
梅の幸いれ団のお侍　性高

壬入

れ、

拾知

夕、

梅香有

寄、

多知世

号なる絮年の中入木のめし　大町
荒もう刃まく人を見新る　丈李
原の時ふくくれの月　支尼
乗笛を知て合する枕の月　羽
苟菜のをを寄れいれ集　ソセン
仮初ゆくくふんト市　ギ巧
年三のんをくて忍しれ　栄友
ちくと日れる家のあた　去来
百の心を初て征の声　考
言付てある たぐ桶の敷　杜李
ゆてはとんちゆくお賀世　吉仲
除るて廿子をたす役芸　依曲
除るもあくてめ三体わ　花字
訳もゆんるゆて小竹書　毋風
仏法も世法も初て寄め新　金庭
いろはて万すまぬゆ　英楚
何ゆくとまくそそ月一ワ　風竹

巳上い正格二去のおく紙の例おきあるよ考く
変よ入〳〵れと侍ての変格もあり
千化　芳重　柳水　春雨

巳上い正格三去のおく紙の例おきあるよ考く
槿泉　文松　交暁

巳上二例い正格五去のおく紙の例おきあるよ考く
正秀　孤仏　秀　麻仏　琴尤　風茅

キ角　為

柔 芙

梅 中 連

阿麦ヲ 張

泥 和

梅 中

支考

以之

柄女

伯風

梅之

茸二

風麦

良不

義

夕九

宮名

百路

イ花

西至

牧夕

アメコ

ロ打徒翻協協の手麦す　古信　史近

むの山風乃ひつむ仮ふ仮

右正格二去和の麦倚く

栗九

二

入和ゐるとそ元を行くを

岩多

そ

一荷よたくぬ多の哭和

哭ゐる度ゐうと月と宝

亡之

宝屋くやくく人いまくく

り和

宝

ま

陽詰生ゐ元い病も不常あき

麦干

まく行のおゐまきき仮名

泥山

白南

白

ロ右くめくく桂の白麦

夕那

ロ比の旅も山より手手

和麦

手の白誓を眉まくく

手屋

有琴

梅 中

行宝も中まよむの候ゐう

まゐ病く大去　四よ去あ西

呂杯

西まちく中よてゐ月永ゐ

光

右正格三去和の麦倚く

夕白の麦張ゐ月も丑宮

又作り
医

やふ入風邊は修の重之
医表あ〳〵痛〳〵苦まあり
右正格去去あ左三倭い正格亟去地の妻く

希欠
吐哉

佐も大きふ考うあれ〳〵
他人拒絶あ何い正格亟去地の妻く
月らさて至は負うそ

猪重
加中
習位

トテ
さて

今三の除重之の玉
峡水
義

倭海る
ま

神よ入る面新義之奏部
候のむあり明考れす

糜附
佑未
り未
三愛

読花
う

交状所て考て考ふ
考る考考の天乳部考〳〵
あるふ〳〵る玉戸北表

△留字戎妻格

重宗
示右
用雪
支考

ヤへ
よ

考ふ〳〵つきいうの山格
考ふやあ〳〵加人こ考
考を〳〵初て考〳〵位るよ
唸佳ふ〳〵その芸も格〳〵考

奥
す

先ア人ア中あ る 横のあ〳〵出〳〵 重乃
門考の傳も 未宮〳〵す 呂凡
芋考る 沙の世実は考ぬ り和

考
ぬ

生代も未宮人の衣表分 呂杯
お大ユ乳の口も掲れぬ り考

出多
く

考〳〵又除さ〳〵ふりきく 考波
除の者は考の考中〳〵 右紀
三月の二ては出る紀考〳〵 東和

トテ
と

〳〵人あ〳〵さ〳〵は考傳〳〵と 重
阿を左〳〵扱杏て竹生注て 月考
〳〵あ〳〵を人て考人遠〳〵と 蓬角

右正格三去あの妻何〳〵

△の字留仕換

似去
、

古格

〳〵も 初考の
敷の下考〳〵て〳〵ち桂乃
、

一〳〵 考傳の横は〳〵ん手白〳〵の 杵用
、又度 ぬれ掠や少は出れ手堂の 去

一字　限られたる字をきりてのもちての義
一おんな　名ばかりの三つ指ばかり指の作法
三千　曲れとをれぬ方の柳の草二
張　あるかの辞多い毒の葉の文物
栽　時々の葉より移の者の聖泉
況モ　其白家の目をもく松葉の蓬角
文採　よりもの葉の君代あれや林の田の林始
家六い天和家の義の設度五い支考設皆作家
豆ゝ寺の字留まおく附い結信の作よるおく
拾の字いおの石丸を字る辞あれい支ら留まある
時ゝよりよ必其家つく不あくて六叶ゝ手　古今十五次
逐ゝおの風と字ゝ林義林の移も四くゝ人の人の民い
義の風もちるゝく人の人の移も四くゝ民人之上の柳も
曲れとをれぬ。字の柳のト切字を入ゝ不みるを
ぬトヲく続く辞と用ゝるあるあくゝめゝうゝ民人を
ゝくゝ引さる人い字よ用るゝあるれ

海印録六終

復古
蕉門　曲齋先生著述目録

貞享式海印録　全六冊
蕉門俳式の書世より多くとのべども頻古式を源くゝれい祖義の式を正ゝ沒句を挙て法を編ける也

海印録後編　刻
先書よりれゝ法式移りとあつる

掌中海印録　折本
先書の中より指合去姪及用字の級び人倫五義の句移ゝのみを抜萃ゝ掌と便利なる

七部樂心録　全六冊
七級系の沒よりよりせく俳句よ移ゝの法あるを弁解ゝ巳百医未俳孔をるち有るを沒編ゝ

俳句見立続　追補
元立級向句作の三法ゝつさく七級系より弟ゝ移ゝる移作を集ゝる事ゝ山のちゝ

十論大全　刻
十論共為弁移及柳ゝ尾の巳決と加ゝ巳評論を添ゝる書ゝ

十論因陀羅網　追刻
一枚摺
俳書奥をりて巳風の俳作を立姿先情移の巳字をりく奥ゝ
りゝる方の根元を為る図画ゝ
別ゝ巳俳の系本雨移あり

元禄新題集
享保新題集　追刻
此無類題集あつめて蕉門の四季を
分ちたる頭書に古人の俳諧をとり
あつめて好士の為にせり

四季之部　折本
季寄の書を世に多しといへども其
撰蔵の分ちて旧鑑を改る稿
あさき故にこれを行ふもの也

芙蓉名所寄　追刊
是ハ諸家の名所句を集めて類句
支考の用を為さしめるもの

篇突　宗匠法則　五老井先生述
蕉門法式論　再刻

笈日記　各集日記　同

東花集
西華集　合巻　再刊
表八句帯白根第三点
俳諧老人自序をくはへ
られたるもの

俳諧句七部集　彩雲守。夜話狂。三匹猿。後山伏
南光雕諸。東山峯並。八夕霧

涼菟七部集　日の出。皮籠摺。一幅半。山中集
滝とみえ。七名八面。鵜の音

古之俳諧より享保迄の附句の集
追て再刻

諸國書林

京都	寺町二条下	橘屋治兵衛
仝	五条上	山城屋佐兵衛
	三條堺町西	出雲寺文次郎
	二條柳馬場西	林芳兵衛
東都	日本橋一丁目	須原屋茂兵衛
仝	二丁目	山城屋佐兵衛
	芝神明前	岡田屋嘉七
	下谷御成道	英文蔵
奥州	仙臺	伊勢屋半右衛門
	會津若松	齋藤屋八四郎
出羽	米沢	辰巳屋長左衛門
加賀	金沢	八尾屋喜兵衛
仝		近岡屋太兵衛
越前	福井	帯屋喜八
	鯖江	油屋嘉右衛門

越後水原　小田島儀兵衛
信濃善光寺　蔦屋伴五郎
美濃加納　三星屋宇助
近江彦根　本屋九兵衛
泉州堺　具足屋重兵衛
尾張本町七丁目　永樂屋東四郎
仝十丁目　菱屋藤兵衛
伊松阪　本屋嘉助
勢津　山形屋傳右衛門
仝　篠田伊十郎
紀州和歌山　坂本屋大次郎
仝　帶屋伊兵衛
土佐高知　政田屋民藏
阿波德島　天満屋武兵衛
讃岐丸亀　小川屋万五郎
播州姫路　灰屋輔二

備中倉敷　太田屋六藏
備後福山　笹屋喜兵衛
雲州松江　尼崎屋喜三右衛門
因州鳥取　油屋仲藏
藝州廣島　世並屋伊兵衛
長門萩　山城屋彦八
下関　野上屋權左衛門
豐前小倉　中津屋卯助
肥後熊本　小島屋義八郎
肥前佐賀　紙屋惣右衛門
心齋橋安堂寺町北　秋田屋太右衛門
仝博労町北　河内屋茂兵衛
仝北久宝寺町南　河内屋源七
仝北久太郎町北　河内屋喜兵衛
仝本町北　鹽屋弥七
仝安土町南　河内屋和助

浪華